
仮面ライダー×仮面ライダー コラボ大戦 E X 【再開のD / 二色と三色と騎士と...?】

緑紫 混離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー コラボ大戦EX【再開のD/二色と三色と騎士と…?】

【Nコード】

N4327W

【作者名】

緑紫 混離

【あらすじ】

【注意事項】この小説は、作者月詠様の作品、【とある能力の異常言語】とコラボしております。それぞれの物語のいきさつやその他諸々は本編を是非お読みください。

仮面ライダードゥーツである左乃宮一に突然電話がかかる。それは学園都市・DOTWOO・OOOを巻き込んだ、新たな事件の幕開けであった……。

DOTWO& a m p・禁書目録サイド・第一話(前書き)

コラボ編を一度別小説として投稿させていただきます！

それでは、スタート！

DOTW&.p・禁書目録サイド・第一話

学園都市 とある路地裏。

「…これで…本当に俺達は無敵の能力者になれるんだな？」

「ええ。勿論でございますとも、お客様。私どもは決して嘘はつきません。」

「「…兄ちゃん。やったな!！」」

…学園都市のとある路地裏。そこには三人の青年と一人の老人が立っていた。

三人の青年は、三人ともそっくりだが…一人だけ少し背が高く、赤いリストバンドをつけている。

残りの二人は全く同じ服を着、違いはピアスがついている耳が右が左か、と言う事だけだ。

その三人の青年は紅色のUSBメモリを手にし、嬉しそうに笑っていた。

「私どもとしては、それで貴方達の力が上がるとなれば…喜ばしい事でございます。」

「なあに…払う金払ったんだ。その分能力は確かなんだろうしな…。」

青年の中で一番背の高い一人が老人を脅す様にそう言うと…老人は、それを気にもせずに笑う。

「ええ。もちろんです…貴方方はそのメモリに対する適合率も高い様です。」

「兄ちゃん、これ使っていいか!?!」

「おう…いいぞ。」

三人の青年はそういうと…メモリを首にある生体コネクタに挿入していく。

HAWK!

PEACOCK!

CONDOR!

そのガイアウイスパーからの音声と共に変貌していく三人を…老人は薄気味悪い笑顔で眺めていた。

ある日 午後1時・鞍坂探偵事務所。

「……はあ……。仕事に来る時は来るんですが、来ない時は……全く来ませんねえ。」

……その日、左乃宮一は暇だった。

……それもそのはず。最近はペット探しやドーパント退治、はては警察との協力での少年犯罪者グループの逮捕劇（刃野に誘われた）まであったのだ。

だが疲れているという風も無く、一はその折角出来た貴重な休憩時間を怠惰に過ごすのである。

「……いやーちゃん。なんか面白いこと無いですかあ〜？」

「……あつたらこうやって暇してませんよ……。」

隣のソファでゴロゴロと寛いでいるマーブルも、いい加減読み飽きたのか持っていた本を机に置き、駄々をこねる子供の様にそう言う。

「……けど、ほんまに暇やで……どっか、出かけたりせえへん？」

「何処にですか……っと。」

近くでダラダラとカフェオレを飲んでいたアカネもそれに賛同し、一に語りかける。

だが、一はつまらなそうにシケードフォンをカチカチと弄りながら

そう返す…と、その時一表情が変わる。

「ん？…なんかあった？」

「あ…いえ、出かけるところ…そう言えばあるんですけど。」

一は椅子から立ち上がり、シケードフォンを操作しながら鞆を手に取る。

それを見たマープルは不思議そうな顔をして…すぐに何か思い出したのか手を叩く。

「ああ…そう言えば。」

「ええ…約束していたのに、すっかり忘れていたんですよ。」

「…？なんや、約束って？」

「実はですね…。」

一は、何も知らないアカネに説明を始める。

…それは、数日前の出来事…。

5日前 鞍坂探偵事務所。

「はい、こちら鞍坂探偵事務所…って。」

一が電話を取ると、そこからは懐かしい友人の声が聞こえてきた。

うん。久しぶりだね、一さん。

「…本当に久しぶりですが…何用ですか、音無さん？」

懐かしい友人…今は学園都市に住み、しばらく会っていない少女…
音無咲也に一は疲れたような声で返す。

いやあ…ちよつと知り合いが大変なところに行つてね。是非君に
来てほしいんだよ。…あ、マープルちゃんも一緒にね？

「ふむ…そう言う事なら各かではないですが…けれど、少し仕事が
立て込んでいますよ…。何日か後になりますが、いいですか？」

一がそう言つと…咲也は少し不満そうに返す。

なんだ…だったら、もう君は来なくてもいい事になってるかもし
れないよ？

「…別に、いいでしょう。だったら私は懐かしい友人に会いに行く
…ということぞ。」

一が少し笑いながらそう言つと…少し間が空いてから、慌てたよう
な咲也の声が返ってくる。

…そ、そうかい？ならいつでもいいけど…待ってるから。

「ええ。是非行かせていただきますから。お楽しみに。」

そういって、一は電話を切った…。

「…と言う訳で。私は友人に会いにも行きたいので、学園都市に…。」

「ちょ、ちょいまって!!」

一が言いながら身支度を整えていると…アカネがハリセンで一の頭をはたき、声をかける。

「あだあつ!?!…何ですか、アカネさん…。」

「学園都市って…あの、超有名な学生だけの都市とか言つとこやろ?!」

興奮しているアカネに、一は若干距離をとりながら答える。

「え…ええ。正確には、学生とその教員などもいますが、基本は学生ばかりのところ…のあそこですよ。」

「…もしかしてアカネちゃん…行ってみたかったですか?」

「当たり前や!!」

アカネはそういうと…自分もカバンを持ち出し、身支度を始める。

「さ、鞍坂探偵事務所…IN学園都市や！！行くでー！」

「おー」

「……。おー。」

アカネがノリノリでそう言つと、マープルもそれに乗り…そして、
ーは疲れたようにそう言つのであった。

学園都市 とあるアパート。

「…ん？霊夢さんはまたなにをやってんでせうか…。」

アパートの一室、そこにいたツンツン頭の少年…上条当麻は隣の部屋から聞こえた騒がしい音を聞き、不審げな顔をする。

「はぁ…今日は一段と不幸だ…もう今日は外に出ないでおこつ…。」

当麻は、すぐ不審げな表情を戻し、疲れた様な顔になり、ぐろりと床に倒れる。

…当麻は今日、近くのスーパーのタイムセールに行き、おばちゃん

にエルボーや裏拳を喰らってまでも手に入れた一パック94円の卵を買ったが、それもすぐに通称ビリビリに戦いを挑まれ、割れてしまった。

その後、諦めて歩いて帰る途中も、ガムを踏む、犬に噛まれる、スキルアウトに絡まれるe t c …

いつもいつも不幸と自負している当麻であるが…今日のは一段と不幸であった。

「もうやだ、上条さんはずっと家にいるんだ…。」

当麻がそう自堕落な事を呟いていると…近くから足音が聞こえ、当麻はそれに反応し、顔を上げる。

「とーま、とーま。お腹空いたんだよ。」

そこには、長い銀髪と碧眼を持ち、純白の布地に金の刺繍をされた修道服を着た少女。

十万三千冊の魔導書を記憶したイギリス清教「必要悪の教会」所属のシスター及び魔術師。インデックスが立っていた。

「…インデックスさん。今家には全く食材も無く、お金も基本ないのでしょ…買い物にも行く気はしない。」

「ふっふっふ…甘い、甘いんだよとーま！これを見て…！」

なにか、意味深にインデックスが笑うと…当麻に一枚の紙を見せる。

「ん？なんでせうか…って、『喫茶店・ポレポレ4000円無料券』…？」

「そう！スフィックスが偶然持ってきたんだけど、それを使えばこのお店で4000円分はただで食べられるんだよ！」

…『スフィックス』が持ってきた、と言う点は当麻の少し引っかけたが…だが、それも無料という言葉の前ではチリにも満たない。

「ただ…インデックスさん、マジですか…？」

「マジだよ！さ、行くよとーま！」

インデックスが元気にそう言うと、当麻も立ち上がってガッツポーズしながら言う。

「お、おお！上条さんもテンション上がったよ！」

「あそこはカレーが美味しいって聞くんだよ！さ、行く行く！」

「おお！晩御飯がカレー…しかも外食！」

…そして二人は仲良く、無料券を持ってポレポレに出かけるのであった。

風都・風都駅。

「…えーっと…ああ、この列車ですね、乗りますよ。」

「学園都っ市 学園都っ市」

「アカネちゃん、乗るのは前のお客さんが降りてから…。」

一達鞍坂探偵事務所の面々は、風都駅から電車に乗り、学園都市に向かおうとしていた。

…アカネのテンションが、あれからうなぎ上りになり、その日のうちに出発することになったのだ。

「…ねえいーちゃん。本当に言っつて大丈夫なんですか？」

「え？ああ、それはもちろん。学園都市にまだ友人もいますし、いろいろ」「そうじゃなくて。」「…?」

心配そうに言ったマールは一は気楽そうに返すが…マールはそれを遮って真剣そうな顔で問う。

「…この町にいない間、誰がドーパントを止めるんですか。」

「……………ああ、それですか。」

一は、言われた言葉に納得した様な顔をし…そして、即答する。

「問題ありません。なら、私達以外のライダーに頼みます。」

「…え?」

マーブルはその一の答えに、一瞬呆けた顔になる。

「別に、私達以外にもライダーはいるで「聞いてないですよ!？」
…そういえば、言ってませんでしたか…」

一は、少しむくれた顔のマーブルを見て、「可愛いな」と思ったが
…それはさておき、思考を元に戻す。

「別に、私達のドゥーツドライバーが特殊なだけで…一本のメモリ
だけを使って変身するロストドライバーなら、作れなくはないので
すよ?。」

「それは知ってますけど…私も作った事ありますし。」

「なので、大丈夫ですよ…今のところ、知っているだけでも3人い
ますし。」

一は、頭の中で三人の仮面ライダー…友人達を思い出す。

イモータル ジェスター
怪異や大道芸…この三人ならば、ドゥーツがない間十分にやって
くれるはずだ。

「…私、全くそういうの知らないんですけど…」

「まあ、あの三人は手に職持ってますから…と言うか二人は高校生
ですし。いろいろ私が忙しい時だけ手伝ってもらっているのですよ。」

「…今度から、隠し事なしでお願いしますね?。」

「……………はい。」

一が自分以外の仮面ライダーについて説明していると…むくれた様な顔のマーブルを見て、マーブルがなぜ少し怒っていたのか気付く。

「……………おい、その二人。ラブコメつとらんと…さっさと行くで！」

「あだだだッ！！行きます、行きますから！」

…と、そこでいい加減痺れを切らしたアカネが、一の耳を引っ張って電車の中へと連れていく。

「あははは…アカネちゃん、元気ですねー。」

それをみて、マーブルも優しく微笑むのだった。

学園都市・とある廃墟の一室。

そこには、一人の美女とモヒカン、そしてスキンヘッドの男がいた。

「…兵二。ボスから連絡があったぞ。「久々に遊びに行く」…と。」

「北西…マジか？」

「マジだ。」

スキンヘッドの男が問うと、北西と呼ばれた美女は無表情に頷く。

「ヒヤッハー！ならパーティーでも開くか？盛大にケーキでも買つてよおー！」

「別にそこまでしなくてもええじゃろ…とりあえず、会場の予約してくる。」

「お前ら二人とも落ちつけ。」

モヒカン…録助とスキンヘッドの男、兵二が暴走しそうになるが、北西は普通に突っ込む。

「…まあ、来るとなつたら出迎えくらいは必要だろうな…うちの下端は幻想御手の事後処理に忙しいし…。」

「なら、俺達が行こうぜえ。」

「それはいいの。久々に兄貴の顔もみたいころじゃし。」

そう兵二が言うと…三人は立ち上がり、廃墟から出ていく。

学園都市・入口近く。

電車に揺られること1時間…鞍坂探偵事務所の面々は学園都市に来ていた。

「やってきました、学園都市！」

「何から検索しましょうかねっ!!」

…アカネとマープルは、実に楽しそうにウキウキとしている。

対して、一はどこか浮かない顔だ。

「…あー。久しぶりに来ましたねえ。」

「なんや、楽しそうやないなあ。久々なんやろ？」

「それはそうなんですけど…なんといいますか気が乗らないのですよ。久々なのは久々ですけど、嫌な予感が「ヒヤッハー!!」…したんです。」

一がそう言っていると、目の前にバイクに乗ったモヒカン達が現れる。

全員、制服の様に革ジャンを着、グラサンをかけている。

「…え？」

「……あれ、今って世紀末でしたか？」

そのモヒカン達に、アカネとマープルはフリーズするが…一はゆっくりとモヒカンの一人に近づき、一発殴る。

「あダアッ!」

「…お前ら何をしてるんですか…?」

一がふるふると怒りで震えながらそう言うと…殴られたモヒカンのリーダーらしき男が弁明する。

「いや、総長が学園都市に帰ってくるって咲也さんから聞いたんですよ。んで、俺らが迎えに来たんで。」

「……………あの女は毎回毎回厄介な事を…!!」

モヒカンのリーダー…録助は一に頭を下げながらそう言うが、一は米神を抑える。

「…あの、いーちゃん?知り合いですか?」

「?なんだ総長、彼女出来たんですか。」

マープルが恐る恐る一の肩をつついてそういうと、録助は一に問う。

「あ…貴女達にはまだ説明してませんでしたね。コイツらは元私の部下です。」

「…部下?」

一の答えにアカネが更に聞くと…録助とモヒカン軍団が前に躍り出

てババツとポーズをとる。

「そう！この人こそ、俺らスキルアウトの華！【マスク仮面流】初代総長、大能力者にしてスキルアウトの味方！！英雄超活性ビルドアップ「ハズいからやめなさい。」あべし！」

モヒカン達がそういうと、一はゴガンと録助の頭に拳骨を落として黙らせる。

「…え っとつまり…若気の至り？」

「……………はい、そうです。」

マープルがそういうと…一は気恥ずかしそうに帽子で顔を隠し、そう言っ。

「さあ総長、こちらへいらして下さい！皆でパーティしましょうぜ！そちらのお嬢さん方もどうぞ！」

「あ、ならお言葉に甘えて！初めての学園都市なんや、楽しむでー！」

「……ヒヤッハー！！」「」

アカネが拳を掲げると…他のモヒカン達もそれに続き、楽しそうに叫ぶのだった。

「…ああ頭が痛い。」

「あ、そういえば北西と兵二から頭痛薬預かってきやした。『絶対

頭痛起こすから』って。」

「…分かってるならよこすなと…!!」

…一は米神を押さえて頭痛に耐えていたが。

学園都市・大通り

「さ、ポレポレはこっちだよ、とーま！」

「はいはい、忙しいですねインデックスさんは…。」

当麻とインデックスは、二人で大通りを歩きながら、ポレポレへと向かっていた。

当麻はゆっくりと歩いているが、インデックスはとても楽しそうに無料券を片手に駆け足で向かっている。

「速く、速く…きゃ！」

「ん？」

と、その時インデックスが当麻の方を向きながら走っていると…ド
ンと何かにぶつかり、こけてしまう。

そして…その時、持っていた無料券もどこかに飛んでいく。

「いたた…気をつけてよ!!」

「…い…インデックスさん？」

インデックスは後頭部を押さえてぶつかった何かに文句を言うが…それをはたから見ていた当麻は少しおびえながらインデックスに声をかける。

「なあにとーま。……………ん？」

インデックスも、当麻のその様子に不審げになり、後ろを見る。

するとそこには。

「……………」

「……………」

スキンヘッドの頭に黒い仮面の様なタトウをいれ、グラスンをかけた…いかにもソツチ系…ヤーさんの様な男が立っていた。

しかも、その男の後ろには、何人ものガラの悪いスキルアウトの様な男達が立っている。

「…おい嬢ちゃん。」

「…なあに？」

スキンヘッドの男が、インデックスに話しかけると、インデックスはまるで物怖じせずいき返す。

「い…インデックスさん？」

当麻がどうやってインデックスを連れて逃げるか必死に考えていると…男は、インデックスに近づく。

「やべっ…!!」

当麻はそれを見てインデックスに駆け寄ろうとするが…男は、急に頭を下げる。

「…悪かったの。わしが前ちゃんと見とらんかったからぶつかってもつて。」

「……………へ？つて、ぎゃ…!!」

それを見た当麻は固まり…そのまま駆けていた勢いでこける。

「大丈夫！私は怪我もしてないんだよ！」

「ならよかつたんじゃが…。」

スキンヘッドの男は、頭を掻きながら申し訳なさそうにインデックスに言う。

「でも、お嬢ちゃんの持ってた何か…飛んでったぞ？」

「ん？…あぁっ、無料券が…!!」

インデックスが気付いた時には…もう無料券は風によって遠くに運ばれていった。

「ありゃあ…回収不可能だな。」

スキンヘッドの男の後ろにいた一人がポツリとそう呟く。

「…のお嬢ちゃん。あれは無料券といったが…いくら分じゃ？」

「え？…4000円分が二枚。」

見るからに落ち込んでいるインデックスに、スキンヘッドの男は問いかげ、インデックスはそれにこたえる。

「なら…ほい、これは詫びじゃ。」

男はそう言つと、懐から財布を取り出し、万札を二枚インデックスに渡す。

「え…いいの!？」

「もちろんじゃい。男と女で何かあったら、それは強制的に男が悪いつてことになるんじゃ。」

男はそう言つと歩きだし…すぐにその姿を消した。

それを見送った当麻は、インデックスに駆け寄る。

「大丈夫だ、ボス。皆ちゃんと強炭酸だけだ。」

「炭酸で酔わせるアレか…。」

一は、廃墟に置かれた場違いなソファに座り、隣にいる黒髪の美女イノウエホクサイ猪上北西と話していた。

…その後、モヒカン軍団によってこの廃墟…【仮面流】のたまり場に連れてこられた一達は、その後【仮面流】の幹部メンバー…スキーンヘツドの男、イノウマヘイジ袴馬兵二とクルビユーティーの美女、猪上北西、そしてモヒカンの男、キガミロクスケ木上録助が全員そろうまで雑談をしていた。

そして、全員が集まると…一気に宴が始まり、メンバーが和気藹藹と騒いで楽しんでいたのである。

ちなみにアカネはハッハー軍団と仲良くなり、全員とメアドを交換後、カラオケで楽しんでいる。

マープルは、能力の事に頭がいつぱいで、何人かの女性メンバーと話しながら、検索をしている。

そして一は…周りの騒いでいる仲間をしり目に、一人北西と強炭酸のコーラを飲みながら話していた。

「…と言うか、咲也はどうした、咲也は。」

「ああ。こちらで宴会する、と言ったら『なら、終わったら酒か何か宴会で余った物持ってきてくれ』と。」

「…あいつは…。」

「は、頭を抱えてそう言うが…それを見た北西は、ニヤリと楽しそうに笑う。

「だが…どうにも楽しそうじゃないか、ボス。敬語なんて全く使えなかっただろうに…よくそこまで行ったな？」

「…俺様だってな、少しは成長するっつの。」

「はふてくされたようにそう言い…コーラをグビリと煽る。…だが、すぐに嘔き出す。

「がはっ…!!!ぐっ…!!」

「がもがき苦しんでいると、北西は自分の分のコーラを差し出して笑いながら言う。

「それは咲也さんの差し入れのドクターペッパーだよ。…ほら、口なおし。」

「…あの女…よりによってコーラにドクペを紛れ込ませやがった…」

「は、ニヤつく北西からコーラを受け取り、一気に飲み干す。

「…ッはあ。………そういや北西。」

「ん？なんだいボス。」

「俺様がいなくなってから…なんか変わったことはあるか？」

「一が、真剣身を込めてそう言うと、北西は普通に答える。」

「ふむ…特にはないね。レベル5は少し変動があった、と聞いてはいるけど。」

「…どうせまたあの一方通行が第一位だろ？全く…アクセラレータアクセラレータだかXLR8だか知らねえけどずっと一位ってのはどんな気分かね。」

「自分はエコーエコーが好きだな。」

「…そっちの話に乗ってきたか。」

「一と北西が、某10と言っておきながらそれ以上のエイリアンヒーローに変身する少年の事をいいながら飲んでると…北西は、ポンと手を叩いて言う。」

「ああ、そういうえば面白い物が最近流行っているな。」

「…なんだよ。」

「仮面ライダー…と言った。」

「…仮面ライダー？」

北西のその言葉に、一は訝しげな表情になる。

仮面ライダーは、今のところDOTWドットウOや何人かいる風都のライダーだけだ。

考えられるとしても、マーブルが異世界で会った仮面ライダークウガと、前にマーブルから嫌と言うほど説明を受けたレジェンドライダーズとニューライダーズだけだ。

それにしても、こことは違う別の世界で戦っている、と聞いているので違うであろうし。

「…そのライダー、どんな色してた？半分ことか、紫色とか、黒色とか、紅白だとか。」

「赤・黄色・緑で三分分されているそうだ。」

「…三分分？」

「は、その姿になんともなく覚えはあった。」

「…あー、それって髪に赤色のメッシュがあって、鷹の髪飾りがあるって、胸に鷹・虎・飛蝗のマークがある円盤みたいなのつけてる？」

「ああ。だいたいそんな感じらしいが…なぜ知ってる？」

「少し会った事があったな…。」

北西が不思議そうに問うと、一は苦笑しながらそう言う。

「…同じ世界の住人だったのですね、^{オース}○○○は…。」

「は内心そう思いながら、ゆっくりと立ち上がる。」

「…どうした、ボス？」

「このままここにいるのもただ飲んでるだけだし…ちょっと、夜風でも浴びてくる。」

「……………ああ、お決まりのビルの上でかい？」

「が言っと、北西は合点が言ったようにそう言う。」

「ああ。んじやな。」

「はその言葉と共に、自身の能力を発動させる。」

「…ビルドアップ超活性化。」

「そのその呟きと共に、一の脚が一瞬紫電を帯びたかと思うと…一はその廃墟から跳び出していく。」

トン、と特に大きな音もせず、ただの跳躍だが…一は、数十mを軽く飛んでいく。」

そして、アニメや漫画に出てくるキャラクターのように、ビルからビルへと壁を蹴って進み…すぐにその姿が見えなくなる。」

「…あれはあれで、チートな能力だよねえ。」

北西はそう呟き、久々に見た一の能力を思い出す。」

一の能力名はビルドアップ超活性化。」

その名の通り身体能力を超人レベルまで上げる能力だ。

反射神経、運動神経、筋力、視力、聴力…他、人間が基礎的に持っている能力を全て数十倍にまで跳ね上げるのだ。

ただ、それだけの能力。身体能力をあげ、炎も、風も、電気も出すことなく、ただ肉体で戦う…それは、能力者達にとってはだいぶ異質に見えたはずだ。

一は、その能力でスキルアウト達と拳で語り合い、自身は総長になるまで力を磨き、強くなった。

それが…今は、人のために仕事をする探偵をしているのだ。

北西は、そんな一のことを思い、優しく微笑む。

「これから頑張れよ…ボス。」

学園都市・とあるビルの屋上。

「…ここに来るのも久しぶりですね。」

一はそう独り言を言いながら、ビルの屋上を歩き回る。

そのビルは、数年前に潰れて廃墟と化しているが、何かの環境問題

の対策として屋上に作っていた草木はそのまま放置され…一種、まるで森の様な雰囲気醸し出している。

この場所は、学園都市にまだ一が在学していた時、よく時間をつぶすのに使っていた場所だ。

「……………懐かしい。」

一は、そう呟いて笑う。

一が学園都市を去ったのはおよそ3年前。

三年たっているだけでも、いろいろな物が変わっているだろう。

自分の担任だった小萌先生はもう成長しているかもしれない、黄泉川先生はいつも通り働いて出世しているかもしれない、行きつけだったミルクデッパーでは相季さんが新しいケーキを作っているかもしれない。

自分がいなかった間、交流も何もなかった人たちのことを思い出しながら、一は笑う。

「明日になったら…会いに行きますか。」

一は、そう自分の中で決めると、ゆっくりとその場から歩きだし、廃墟へ戻ろうとする。

「……………ふむ？」

と、その時…能力で強化されている耳に、何かおかしな音が届く。

なにか…荒く息をしている音と、なにかを引きずるような音だ。

音は、ちようどこのビルの真下あたり…このビルで作られている路地裏のところだ。

「…行きますかね。」

その音になにか荒事の気配を感じ、一はひょいっと跳び…その路地裏の場所へと跳び下りる。

午後7時。学園都市・ポレポレ。

「…おかわりっ…!」

「はいはい…いやあ、お嬢ちゃんいい食べっぷりだねえ。俺も嬉しいよ。」

「まだまだいけるんだよっ…!」

…インデックスは、ポレポレでカレーを食べまくっていた。

おやつさんも笑顔で気にいるほどの食べっぷりだが…それを隣で見ている当麻は浮かない顔だ。

「…あの…インデックスさん？予算は二万円なんですが…だいじょうぶかー？」

…インデックスは今食べているのでカレー12杯目…ちなみに当麻は、満腹になる程度にはちゃんと食べれている。

「私はこれくらいで我慢できるほど、まだ食べてないんだよ…！」

「我慢して下さい、お願いします…！」

当麻は土下座までして止めるか…と本気で考え始める。

「いや、別にいいってこの鍋に残ってる分のカレーとご飯だけなら二万円でもいいから…君も大変なんだねえ。」

「……はい。」

だが、おやつさんが笑顔でそういうと…当麻はおやつさんの後ろに後光が見えるような錯覚を覚える。

そして、当麻がおやつさんを拝むか本気で考え始めたとき…。

「ケエエエエエエエエッ…！」

「…ッ!?」

瞬間、ポレポレのガラスが一枚勢い良く割れ、そこから真っ赤な姿をした、鳥の怪人が現れる。

「こいつが、ニュースになってた奴か…！」

おやつさんは、厳しくその鳥の怪人を睨むが…鳥の怪人はゆっくりとカウンターに近づき、カレーが入った大鍋をつかむ。

「俺は怪人だ！このカレーは…もらっていくぞ！」

「え、自己紹介された！？」

怪人が、自分で自分を『怪人』と言った事にとりあえず当麻はつつこむが…怪人はそのまま両手で大鍋をつかみ、脚の鉤爪で近くにあった炊飯器をつかむ。

「ああっ、私のカレー…！」

「すまん…俺も喰う金がないんだ！さらばっ…！」

インデックスの叫びに、怪人は申し訳なさそうな声を出し、飛び立ちとうとする…しかし。

「させるかあっ…！」

「んっ…？へぶらっ！？」

当麻は、怪人がインデックスの方を向いているスキに殴りかかり…殴られた怪人は、完全に予想外だったのか、大鍋と炊飯器をしっかりとつかえたまま勢いよく吹き飛ばす。

「お前…最近ニュースで出てる怪人だな？」

当麻は、幻想殺し（イマジンプレイカー）の拳で怪人を殴った。

そうすれば、『怪人』と言う異能…いや、異形であれば、一撃で倒せる…もしくは戦闘不能レベルまでのダメージは与えられる、当麻はそう思っていた…しかし。

「…イテエな。」

「ッ!？」

怪人は、ゆっくりと大鍋と炊飯器を持ったまま立ち上がり、頭を振る。

「…一応俺も怪人の自覚はあるんだが…普通に殴ること無いだろ、オイ!」

怪人は、当麻に手を向けると…当麻のズボンの裾に、ポツと火がつく。

「うおっ、アチィ!!!」

「んじゃな!そこだけ切り取ればビンテージっぽいだろ!?!じゃあな!」

怪人はそう言うと、殴り飛ばされた勢いでこぼれたカレーの鍋を放置し、炊飯器だけを抱え…ドアを普通に開けてから、ジャンプして飛び立っていった。

「ああ…カレーが!!!」

「ちよ、俺のことも心配してくれ、インデックスさん！アチ、アチー！」

インデックスは、カレーを心配するが…当麻の方は、ズボンについた炎の熱さで跳び回っていた。

「ああああ、大丈夫か？」

だが、慌ててきてくれたおやっさんが持ってきてくれた消火器で、なんとかその火は消える。

「あ、ありがとうございます…。しかし、なんだ？今は。」

「とーま、今のってちゃんと幻想殺し（イメージブレイカー）で殴ったよね？」

当麻がおやっさんに礼をいいつつ、首をかしげていると、インデックスが近寄り、心配そうに声をかける。

「ん？ああ。また魔術師関連の事かと思ったんだが…違ったみたいだな。」

「うん…でも、あんなのは私でも知らないよ？本当、何なんだろう…？」

「…お前で分からなかったら、カミジヨーさんは絶対分かりませんよ…。」

当麻はゆっくりと立ち上がり、ため息をつくのだった。

DOTW&.p・禁書目録サイド・第二話

午後6時。学園都市・とある路地裏。

路地裏の薄暗い中、そこで一人の少女が苦しそうにうめきながら、腕を押さえて壁にもたれかかっていた。

その少女は黒のセミロングに緑のメッシュが一房入っており、服装もパンク風のもの上から黄緑のジャケットを羽織っている。

しかし、その整った顔も、その服も全てが何かで傷つき、所々切り裂かれたかのようにボロボロになっており、肩で息をしている。

「…アツ…ツ…クソツ…！」

少女は、苛立ちのままに近くの壁を殴り…歯を砕けそうなほどに噛みしめる。

「あの野郎オ…！！よくもッ…！！」

少女…いや、800年前に封印された欲望の怪人の一人、昆虫女王・ウヴァはそういい…今の自分が置かれていることになった原因の一人の人間を思って、憎しみを募らせる。

ウヴァがこうなった原因…それは、数時間前に遡る。

午前10時。学園都市・とある廃墟。

「…………ふう。」

ウヴァは、いつも同族のグリード…カザリやガメル、メズールと一緒にいる廃墟を抜け出し、一人別の廃墟に来ていた。

ウヴァは、いつもの人間態ではなく、頭には逆さにした鍬形の顎の様な髪飾り、下半身は黒い包帯で包まれた際どい姿、しかし上半身は緑と黒の虫をモチーフとし、右腕には螭螂の鎌、左腕には黒く刺々しい虫の脚の様な物が生えた鎧を着込んだ姿…本来の怪人態となっていた。

「……………シッ!」

ウヴァは、頭部の髪飾りから電撃を発射し…前方10mほどの位置に置いた10つの空き缶めがけて飛ばす。

その電撃は正確に空き缶めがけて飛び…小気味いい音で命中し10つのうち、9つに命中する。

「…………チッ。まだ安定しない…ブランクってのは大変だな。」

…ウヴァは最近、封印されて800年使っていなかった自身の能力

の再確認をし、その中の一つ、『電撃操作』能力を訓練していた。だが、当初は10つ置いた空き缶のうち、1つ当たればいい方…それを五日ほど特訓して、やっとここまでになったのである。

幸いグリードの身なので、食べ物などもどちらかという嗜好品であり、一日中丸ごと特訓に費やせることがよかったのだろう。

「…さて。ここまでできたらもういい…帰るか。」

ウヴァは、初日と比べた今日の結果に満足し…『帰りにクヌギの森にでも寄るか』と考えながら帰ろうとする。

…と、そこでウヴァは後ろから何かが飛んでくる気配を感じる。

「ん……あだあっ!?!」

…が、気配を感じ取れたはいいが、反応はできず…その飛んできた物がガイン、といい音を立てて頭に命中する。

「な、んだ…!?!」

少し目に涙が浮かぶほどの衝撃に、頭をさすりながらウヴァが当たった物を見ると…それは、赤く薄っぺらい、鋼で出来た鳥だった。

「……本当になんだこれ？」

ウヴァは、それが何か全く分からず、とりあえず触ろうと手を伸ばす。

PIIー！PIIー！

「あつ…ちよ、待て！」

けれど、指先に触れそうになった瞬間、その鋼の鳥は方向転換し、
廃墟の外へ出ていく。

ウヴァは、特に理由もなく、興味本位でそれを追いかける……………。

学園都市・とある公園。

「…ここだな？」

ウヴァは、鋼の鳥を追いかけて追いかけて…そして、人気のない公
園へとたどり着く。

PIIー！PIIー！

と、そこであの鋼の鳥の鳴き声が聞こえ、その方向へ行く。

すると…そこには、その鋼の鳥と、一緒に鋼の青いタコのような物も
浮いており、その中心には、でっぷりと醜く太った一人の眼鏡の男
がいた。

その男は、背も低く厚ぼったい体をしており、まるで汚れた達磨の

様。

体中から汗をかき、上着にはたくさんのポケットがついたジャケットを着、その下に気持ち悪いほど目が大きい少女が書かれたシャツを着ている。

「…なんだ貴様。」

ウヴァは、その生理的に嫌悪する見た目を見て、思わず臨戦態勢に入るが…それを見た男は、ニチャリと汚らしい笑顔になる。

「うぷぷぷ…君が、グリードの一人…ウヴァたんだね？」

「…なぜ、オレの名前を知っている。」

その脂ぎった声(?)で自分の名前を気持ち悪く呼ばれ、厳しい視線でその脂肪を睨むが…尚も気持ち悪い視線を送ってくる。

「君のことは知ってるんだあ。この前、変なおっさんとスキルアウトの三人組がここで話してるの聞いたんだよねえ。」

脂肪あぶらの塊はそこでポケットからタオルを取り出し、脂汗をふく。

「君とその仲間…カザリたん、メズールたん、ガメルたん、アंकたん…その中の誰かを殺せば、金をやる、とかなんとかね…？」

「ッ…!!」

ウヴァは、その男の言葉に愕然とする。

良く分からない四人の人間の話は兎も角…この目の前にいる脂肪おとの塊こは自分を人でない存在…グリードだと知って接近してきたのだ。

「…でさあ。君達が持つてる…【コアメダル】とか言うのを手に入れば…ボキみたいな人にも、お金くれるって言うんだあ。」

「…そうあっさりと渡すと思うか…?」

男が言ったコアメダル…それは、ウヴァ達グリードにとって骨や臓器と同じものだ。

そんな大切な物をみすみす渡すほど、ウヴァも虫頭バカではない。

「そう。だからここに呼んだんだあ。」

「?…何を…ツ!?」

脂肪おとの塊こがまたニチャリと気持ち悪い笑顔で笑い、ウヴァがそれを怪訝けげんに思つと…その時、地面から炎が自分目掛けて立ち上ってくる。

「ガッ…!!アアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!」

自分を飲み込んだその灼熱の炎の熱に、ウヴァは苦悶くもんの声を上げる。

それを見た脂肪おとの塊こはまた楽しそうに笑う。

「うぷぷぷぷ!!苦しいかい?これはボキの能力で、火炎洞窟フレイヤホールっていうんだあ。対象の足元から火炎を立ち上らせて、焼きつくす…! どうだい、レベル4の炎の味は!」

「アッアッアッアッアッアッアッアッ！！」

「苦しいかい…？まあしょうがないよねえ？ボキの能力は、空間移テレポ動トみたいに座標を特定する必要があるけど、その分威力はすごいんだよお？」

…ウヴァにはその脂肪おたくの塊言葉も聞こえない。

ウヴァはグリッドであり、電撃をも操る強力な怪人…しかし、その身は昆虫の性質を持ったコアメダルとセルメダルで出来ている。

虫である以上、火炎にはどうしても弱くなってしまふのだ。それは怪人であるうと逆らえない。

そして…そのダメージが大きすぎたのか、ウヴァの体は怪人態の姿に戻り、ついには体からクワガタ、カマキリ、バッタのコアメダルが吹き飛んでいく。

そのせいか、上半身を覆っていた鎧もはじけ飛び、上半身も黒い包帯に包まれた露出の多い姿となる。

そして、そのコアメダルは近くを飛んでいた鋼の鳥…カンドロイド・タカカンが回収する。

「うぷぷ。この機械便利だねえ。熱暴走させて使ってみただけど、大当たりだよお…。」

また笑い始めるその脂肪を見て、ウヴァは殺意を露わにする。

「ッ…デメエツ…！！！」

「うぶっ？怒ってるのお？だいじょうぶだよ…君の持つてるコアメダル、ぜえんぶ頂いてあげるからねえ？」

だが、脂肪はその殺意にも気づかず笑い、残虐な笑みを漏らす。

「ッ…！！クソがあ…ッ！」

それを見たウヴァは、今は勝ち目がないと判断し…人間態の姿に戻り、逃げていく。

こんな殺意にも気づかない様な、戦士でもない、ただの外道から逃げる自分の悔しさを噛みしめながら。

「うぶぶ…逃げてても無駄だよ。ちゃあんと捕まえてあげるからねえ…？」

脂肪は、それをゆっくりと見送り…近くを浮いていたタカカンとタコカンにウヴァの追跡を開始させる。

…これが、数時間前のこと。

それからウヴァはずっと逃げ続け…途中、タカカンから体当たりや翼での攻撃を喰らい、人間態の姿もボロボロになっている。

「畜生…ッ！畜生！」

ウヴァの心には、深い後悔と憎悪の念が渦巻く。

一つは、もちろんあの脂肪への殺意と憎悪。

もう一つは…自分が廃墟で特訓していたせいで自分だけでなく、仲間である力ザリ達にも被害がかかるという事実…それを考え、ウヴァの目からは自然と涙がこぼれていた。

ウヴァは逃げ続ける。できる事なら、自分一人が捕まって仲間達には被害がいかないよう、できるだけいつもの廃墟からは遠い処へと。

だが、その思いも無駄となる。

…うぶつ。見いつけたあ。

「ッ…!!」

人間態のまま、路地裏で休憩をとっていたその時、後ろからあの脂ぎった声が聞こえ…ウヴァはバツと振り向く。

そこには、あの脂肪の姿と、近くには数匹のタカカンとタコカンの姿もあった。

「…うぶつ…うぶつ…じゃあ、残りのコアメダルもいただいちゃおうか？」

「クソッ…!!」

脂肪は気持ち悪く笑いながら、そのタカカンとタコカンをウヴァめがけて突撃させる。

が、それにウヴァはまだ能力が少しでも発揮できる怪人態に戻り、髪飾りから電撃を発射する。

「アアアアアアアアアッ!!」

「おっと…怖いなあ。」

だが…その裂帛の気合を込めた電撃も、何体もいたタカカンとタコカンを撃ち落とすが…自分の胸に接近してきた、一体のタカカンだけを取りこぼす。

「ッ…!!…!!」

…みんな、ゴメン。

ウヴァの脳裏に、カザリ、アンク、ガメル、メズール…仲間であるグリード達の姿が浮かび…そして、ウヴァは静かに目を閉じる。

そして、次の瞬間来る衝撃に少しでも耐えようと体を固くするが…その衝撃は、いつまでたっても感じない。

「……………?」

ウヴァはそれに「まだ甚振る気なのか」と思いながらそつと目を開ける……と、そこには。

「……………いけませんねえ。」

「う、ぶ、ぶ、ぶ……？」

そこには……。

「女性に手を上げるなど……実に紳士的ではない。」

黒いコートと帽子をかぶりステッキを持った……一人の男が立っていた。

ウヴァは、その姿を見て一瞬呆けるが……すぐに平静を取り戻し、一に疑問を投げかけようとする。

「おい、アンタ「おっと、失礼……お嬢さん、これを。」っ、お、お嬢……！？」

ウヴァが問いかけようとしたその瞬間、その男はウヴァに自分の着ていた黒いコートを渡し、羽織らせる。

……ウヴァ自身は自分が「お嬢さん」と呼ばれた事に驚き赤面してそれどころでないが。

「お、お前なんだよ……？」

「……なんだよとは……いやはや何とま。」

その男は、驚いて問いかけてくる脂肪の声を聞いて、嫌悪感を露わにするが…そのまま、足で踏みつぶしていたタカカン^①をグシャリと更に潰す。

「…淑女に襲いかかり、更には物盗りの真似事までしようとし…果てはこのようにあられもない姿にし、手籠めにしようとは…。」

男は、そこで帽子を深く被り…持っていたステッキを轟音を立てて地面に突きつける。

ステッキは、地面のアスファルトに波紋状に輝を作り…その叩きつけた力がどれほどかを思い知らせる。

「紳士的じゃあ…ねえな。」

そして男は、凍てつくような視線で脂肪を睨み…ゆっくりと歩み寄る。

「うぶ、このお「黙れ、汚らしい息を吐くな。」ぶっ…！」

男は、脂肪の鳩尾をヤクザキックで勢いよく蹴り飛ばす。

それに脂肪は絶息し、思わず腹を押さえて蹲りそうになるが…その無防備になった顔面めがけて、男は顔に膝蹴り、後頭部にエルボーを、それぞれで挟むかのように叩きこむ。

「ぶびゅっ…！」

「…黙れって言ったのが聞こえなかったか？」

その二つの頭に対する衝撃で、グラリと倒れかけた脂肪に男はもう一発腹に拳を叩きこむ。

そしてそう叫んだ脂肪に男は冷たい視線を向け…そして、そのまま仰向けに倒れた男に歩み寄り…勢い良く、鳩尾を踏みつづす。

「ぶびゃ……ッ!」

男が踏んだ時、なにか骨の折れる様な音がしたが…それを気にせず、男はパンパンとズボンの膝…脂肪の折れた歯や汗が飛んだ部分を払う。

そして、ウヴァに近づき…ニッコリと笑顔になる。

「さ、お怪我はありませんでしたか、お嬢さん？」

「あ、え、オレ…あ、私は大丈夫です。」

その笑顔に、またウヴァは顔が赤くなり、「オレ」と言いかけたのを慌てて「私」に直す。

「ああ、綺麗な顔がこんなに汚れてしまって…大丈夫でした？」

「きッ、綺麗…!？」

一は、しゃがみ込んでウヴァの髪を優しく撫でながら、頬の汚れをハンカチで拭う。

ウヴァは、もうこれ以上ないほど赤面しながら、一の顔を少し夢心地で見る。

「私の名前は、左乃宮」と申します…貴女のお名前は？」

「私は…えっと…ウヴァ…。」

そこで、ウヴァは「あ。」と言う様な顔になる。

ウヴァと言う名前はグリードでのもの…人間でその名前は、少しおかしいのだ。

「ウヴァ…ですか。」

「えっと…その…。」

それを聞いた男…一も不思議そうな顔になるが…すぐに笑顔になる。

「いいお名前ですね。」

「…え、え!？」

その笑顔と同時に出された言葉に、ウヴァはまた赤面する。

「ウヴァ…ふむ、スペイン語で【ブドウ】を意味する単語ですね。

ハーフの方なのですか？」

「あ、はい…ウヴァ・片桐カタキリです。」

ウヴァは、とっさに思いついた偽名をいい…そして、先ほど投げかけようとした疑問を再度ぶつける。

「あの、さっきは何処から…?」

「む?…ああ、それはあそこから。」

「は、はるか上を指差す。」

ウヴァがその方向を見ると…その指の延長線上には、この路地裏を作っているビルの屋上が見えた。

「…あの、屋上から?」

「ええ。私、一応能力もちでして…ま、しがない能力ですがね。」

「へえ…。」

ウヴァは、そう話しながら、一の顔を少しうつとりしたように見つめる。

…自身のピンチにさっそうと現れ、今まで褒められたことのない自分の名前を褒められ、紳士的に対応する王子様……まあ、いわゆる一目惚れと言う奴である。

「…ああ、そう言えば貴女の物ですか?」

「はそう言って、ティッシュから取り出した三枚の緑のメダルを見せる。」

「…ああっ、オレのメダル!」

「やはり、貴女でしたか…この豚が後生大事そうに握っていたの

で、もしやとは思いましたが。」

「一は、まだ泡を吹いて倒れている脂肪をステッキで指差し、気遣うように言う。」

「一応、ティッシュで拭きはしましたが…まだテカテカしてますね。」

「…あとで、水で洗います…。」

ウヴァは、自身の体の一部であるコアメダルがあの脂肪の手で汗に汚れたのか…と一瞬気持ち悪くなったが、それでも自分の体の一部大切そうにティッシュごとメダルを持つ。

嬉しそうに笑うウヴァを見て…一も、自然と柔らかい笑顔になり、そしてポンと手を叩く。

「そうだ、貴女、服は大丈夫ですか？」

「服？……あ。」

ウヴァは、その言葉で今自分がどんな格好なのか…思い出す。

今の自分は、上半身と下半身に際どく黒い包帯を巻き、その上から借りているコートを羽織っているだけなのである。

…一応、コートの丈が大きいので、全身すっぽりと隠れてはいるが。

「…あいつ、どうやら^{バイロキネシスト}発火能力者の様ですし…燃やされてしまいましたか。」

「いや…あ、そうなんです。」

ウヴァは、それに反論しようとするが…それも意味がない事に気が付き、頷く。

別に、今人間態に戻ってジャケットとパンク風の服装に戻ってもいいが…それも、焦げと傷跡で一杯の服だ。

ビンテージ物だとも言い張れないレベルでボロボロだし、逃げている時も奇異の視線で見られていたことは確かだ。

「…なら、少し付き合ってもらえますか？」

「へ？…は、はい。」

ウヴァは一瞬呆けた表情になるが…コクリと頷いて一についていく。

…余談ではあるが、残された脂肪はその後、近くにいたチンピラにより、金目の物を取られ、ついでに呼ばれた救急車により胸骨・肋骨の単純骨折と鼻の複雑骨折と診断され、三カ月の入院。

そして、一の容赦ない制裁のせいで、帽子を一度見ると演算能力が低下し、レベル4からレベル2へ成り下がったのは…余談である。

学園都市・とある服飾店。

「ふむ…まだあってよかったです。ここなら貴女の服も買えるですよ。」

「……………」

「とウヴァは、学園都市の端っこにポツンとある服飾店、『カレ』に来ていた。」

「…ああ、この店名ギリシア神話の美の女神、『カレ』からとって…」

「は、ウヴァが黙っているのを見て、怪しい店名で怯えているのかと思ひ説明を始めるが…別に、ウヴァはそれで黙っているのではない。」

「…この店に来るまで、一に『そのコートだけでは目立ちますねえ…そつだ。』と言われ、ここまでお姫様だつてビルの上をトントンと飛び回って（誤字にあらす）ここまで来たのである。」

「一に好意を持っているウヴァは、お姫様だつただけでも気絶寸前だが、数分の間一が落とさないようにしカリとウヴァを抱きしめていたので…それに赤面し、今はオーバーヒート寸前である。」

「あの…大丈夫ですか？」

「ふえっ！？あ、あの…！」

ポンと一に肩を叩かれたウヴァは、ビクリとオーバーに反応し…一を見る。

「…大丈夫ですか、本当に…あ、まさかさっきの脂肪になにかされましたか？」

そう言っで一は、ウヴァに近づき…ウヴァの額と自分の額をくっつける。

「……………ッ…！」

ウヴァは、香ってくる一の髪の毛の匂いと、一の顔の近さに緊張と興奮を覚え…天道虫の様に顔を真っ赤にする。

「…ふむ、熱は無いようですが…ま、一度店に入りますよ？」

「ふぁ…ふぁい。」

ウヴァは、緊張のあまり噛み噛みになりながらも…差し出された一の手をとり、店へとはいつていった。

…店の扉を開くと、そこにはフリルがついた鮮やかな色のワンピースや、帽子。そして革製の見事なブーツなどが置いてあった。

「わぁ……………」

ウヴァは、まるでお姫様の様なそのワンピースを見て、楽しそうに笑みをこぼす。

それを見た一も、自然と笑顔になっていると…店の奥から、一人の男が出てくる。

「あら？…なつつかしい、一ちゃんじゃないの！」

「お久しぶりです、ミセス。」

その男は、フリルのついたピンクの服を着て、女言葉でクネクネと近づいてくる。

「なんだ、こいつ…？」

正直、ウヴァはその姿に先ほどの男とは違う種類の嫌悪感を覚え、バツと一の後ろに隠れる。

「…ウヴァさん、一応この方はミセス。男ですけど…心は女性です。ちゃんと男が好きですから、貴女に危害は加えませんよ。」

「あら、ひどいわね。三年ぶりでもその仕打ち？…と言うか、その娘はどうしたのよ。」

オカマ…ミセスは一のコートを羽織っているだけのウヴァを見て、不審げな顔をする。

「実は…バイロキネシスト発火能力者でギトギトした強姦魔にこのお嬢さんが襲われそうになり、私が助けたのですが…服も燃やされ、金も無い。と言
う訳で貴方に服を売ってもらいに来たのです。」

「…ふうん…」

「一が演技っぽく目頭を押さえてそう言つと、ミセスはウヴァを見つめ…そして、ウヴァに近づき、手を取る。」

「え、おい…？」

「…安心して、貴女！運がよかつたわね…私が、貴女にぴったりの様服を見繕つてあげるわ！可愛らしく、キュートに！可愛いは正義！…！」

「…なんだこいつ。」

「ミセス、日本語と英語重複してますよ。」

ミセスはウヴァの顔を見てそう言つと…その場でくるりらくるりと回り始める。

ウヴァは手を振り払つて一の方まで逃げるが…一はいたって冷静に突っ込む。

「…さ。ミセスの趣味は兎も角、他人に対するセンスは本物です。着替えても大丈夫ですよ。」

「え、でも…。」

ウヴァがさすがにそこまで、と断ろうとすると…一は、笑顔でにっこりと笑つ。

「私も、手持ちは少ないですが、金は持っていますし…まあ、これは綺麗なお嬢さんへの投資と言つことだ。」

「…ッ…!」

一が笑顔と共に言ったそのセリフに…もうウヴァは耐えられない。

ポフンと、なぜか音を立てて顔が真っ赤になり…一の笑顔から死線をそらし、指をツンツンし始める。

「……………?」

「一ちゃん…アンタ、将来ハーレム作れるわね。」

「…人聞きの悪い事を。」

それを見た一は笑顔のままハテナマークを頭の上に浮かべるが…ミセスがニヤニヤとそう言うのを、否定するのであった。

「あ、ウヴァちゃん、とりあえず…貴女には緑とか黒とか、大人な色も似合うわね!その髪の毛のメッシュとトータルコーディネートしてもいいし、いつその事ピンクとか桃色とかを着たらどうかしら?」

「ピンクと桃色は同じです…と言うか、それは貴方の趣味でしょう。」

「まあね。でも、可愛ければいいのよ!」

「…もう何も言いません。」

一が諦めたような声を出すと、ミセスはどぼつと両手いっぱい服を持ってきて、ウヴァに渡す。

「さ、あの試着室で着替えてきて！この服全部あげちゃうから！」

「え…いいのか？」

「もちろん！可愛いお嬢さんへの投資よっ！」

「……………」

ウヴァは、ほぼ同じセリフでも、言う人によってこんなに印象が変わるのか…と思いつつ、服を持って試着室に行った。

（虫頭着替え中）

「…おーい、とりあえず一着着てみた…。」

「あら、どんな感じかしらっ!？」

ウヴァは適当に選んだ服を着ると、試着室から出てくる。

黄緑のフレアスカートに薄緑のノーカラージャケット。そしてデフォルメされたクワガタの詩集が入ったパンプスだった。

「あら、いいじゃない…それ、第一のプレゼント…！」

「似合いますよ、ウヴァさん。」

「あ…ありがとうございます…。」

ミセスが、いい笑顔でサムズアップし、一はにこやかにその服装を褒める。

ウヴァは、ミセスの言葉に一応感謝しながらも、「似合う」と言った一に礼を言う。

「さ、次々！脱いだ服は私がハンガーにかけとくから！」

「あ、どうも。」

ミセスの言葉にそっけなく返すと、ウヴァは次の服を着る。

次は、白いふわふわスカートに七分丈の裾レースの淡い黒のスパッツ。それにパステルカラーのトップスで、靴は白パンプスである。

「これまた…いいわね、いいわね！ピンクはないけど、それでもバッチグーよ！」

「…あの、何で全部サイズぴったり？」

ウヴァは、テンションが嫌なほど上がっているミセスに、一言問う。

「…ミセスは、透視能力クレヤボヤンスを持っていて…相手のスリーサイズ等が分かるそうで。」

「美容に関しては、誰にも負けない能力よ！」

「…そうか。」

正直、またミセスのテンションが上がったのを見て、『聞かなきゃよかった』と思ったが…それはあえて口にせず、次の服を着る。

次の服は、全体的に緑でコーディネートされたドレスの様なワンピースと、桜の髪飾りをして靴はひざ下までのブーツとなっている。

「あらあら？…これが一番いいかもしれないわねえ…。」

「ですね。お綺麗ですよ。」

「…ど、どじも。」

ミセスは、その服装を見てにやりとそう言う。

「もその服装を素直に褒め、ウヴァはまた照れて赤面する。

「…じゃ、今はこのくらいでいいかしらね…あ、そうそう。」

ミセスは、その服装を見て満足になったのか、笑顔で椅子に倒れ込み…また立ちあがって店の奥に行く。

「…なんだ？」

「さあ？ミセスはある意味何でもありの人ですから…」

「なるほど。」

「の言葉に、なぜかすごい説得力を感じたウヴァ。」

そして、ミセスはすぐに戻ってきて…黒いパンク風の服と、一つの

機械をウヴァに渡す。

「…ミセス、それは？」

「服の方は、ウヴァちゃんごういうのも似合いそうだから選んだのよ。」

ミセスは説明するが、説明を求められているのが機械の方だと気が付き、また説明する。

「…実はうちもね、最近話題のePADって奴を使って、外人さんにも対応しようと思ったのよ。でも、滅多に外人さん来なくて…たまに來ても、日本語へらへらなのよ！で、これはお払い箱ってわけ。」

その機械…薄型の電話もできる便利ツール、アイパツ…失礼、eP
パッド
ADをウヴァは不思議そうに見る。

「あの、これどう使っただ？」

「ん？ああ、それはこの説明書でも呼んで。」

ミセスは、分厚い冊子をウヴァに渡す。

…正直、500ページはありそうな厚い物である。

「…で、何故これをウヴァさんに？」

「強姦魔とかそういう輩は、しつこい物なのよ…で、これあげるから、これで一ちゃんと連絡先でも交換しなさい。」

「ああ、それはいいですね。」

そういって、一も自分のスマートフォンを取り出す。

「えっと…ああ、ここをこつすればいいんですね。」

「は、ちゃっちゃとePADを操作し、自分の連絡先を打ち込む。

「…あの、これは？」

「ふむ…なんていいましょうか。つまり、これで私と貴女はいつでも手紙を出したり、話したりできるのですよ。」

「ふえ！？」

…その時、ウヴァの脳内では一と仲良くお喋りしながらお花畑で散歩している自分の姿が浮かぶ。

「…えっと、これでいいんですね？」

「ええ。ま、詳しい事はそう言うのに詳しい人に聞いたらどうですか？」

「詳しい…カザリか。」

ウヴァは、とりあえずこつというのが得意そうな一人、カザリを思い出す。

…もう一人、アंकもいるにはいるが…「教えてやるよ…代わりに、

メダルよこせ。」とか言いそうだ。

「じゃ、これでもういいわね?」

「ええ。ありがとうございます、ミセス。」

「別にいいのよ。可愛い娘のためなら、私はなんだってするわ」

ミセスはそう言って笑い、ウヴァと一はペコリを頭を下げながら、店を出た。

同時刻・【仮面流】のたまり場。

「……何ででしょう。いーちゃんが誰かとフラグ乱立させてる気がします。」

「気が合うな、自分もだ。」

「……………いきなり何言っとんねん。アンタ等……。」

突然、何か言い始めた二人に、アカネが突っ込みを入れる。

ヒヤッハー軍団と録助が思いつきで生まれた強炭酸のドクペにより全員倒れ、まだ残っているのは北西、マーブル、アカネ、そして兵二だけである。

「…兄貴じゃったら、ハーレムが一番似合うじゃろお〜？ガハハハ
ハ…」「勝手な事を言うなあ！」「あばシリッ…！」

兵二が炭酸で完全に酔っぱらい、そう言うところ…マーブルと北西によるダブルパンチを喰らう。

兵二は、勢いよくのけぞり…モヒカン達の上にバタンと倒れる。

「もう…いーちゃんはいつも勝手に女の子と仲良くなって！と言う
かいろいろモテすぎです！」

「全くだ。ボスは学園都市にいた時も週ごとに別の女連れてたこと
もあってだな。」

「…撤退撤退。」

と、そう二人がいい始めると…アカネはとりあえず面白そうな事になるのを感じ、離れて自分は普通のコーラを飲み始める。

マーブルは酒癖が悪いのもあいまって、顔を真っ赤にしながら、ぶんぶん可愛らしく手を振りながら熱弁する。

「もう、いーちゃんてばいつもかっこいいのに、紳士とかいって妙に優しい時があって、そういうところも大好きなんですけど、その相手を選べ、と思うんですよ！」

「全くだ。自分も一度やられたことはあるが、あれは破壊力あるぞ…
…というか、なんで通りすがりでぶつかつた人にも優しくするのか
訳が分からん。なんだ、選り好みしないということなのか？それに

しては昔『髪の毛長い女が好き』とか言ってたのに。」

北西の方も、顔は赤くなり、表情はマープルと正反対に変わらないが…目が据わっており、こちらも熱弁している。

「そうですね！私は髪長くしてたからストライクゾーン攻めてるはずなんですよ！色々アプローチもしてるんですけど…照れてるのか無関心なのか分からない程度の反応返してくるんですよ！！！」

「ああ。いろいろもらっても、その行為に好意を返さずに、普通の対応するから一番厄介なんだ。バレンタインの時も本命もらっても義理もらっても全員に同じ手作りの物を返すから面倒な事になるんだ！なんだよ、なんで全員にハート型チョコなんだ！それになんて不良だったはずなのに女に人気があつて、料理もできるんだ！」

「そうそう！イーちゃんはなぜがギャップ萌えが結構あるんですよ！！あんなにしっかりしてる時もあるのに朝は弱かったり、でも荒事の際は頼りになる時もありますけど、なぜかそれでも家事全般得意で…私より上手なんですよ、料理！！女の面目丸つぶれなんですよ！！！」

「その通りだ。一度【仮面流】全員でどこぞの廃墟に泊まった事があるが、その時ボスが全員分の服を洗濯したり、食事前用意したり…あれだ、家政婦と言う奴にしか見えなかった。そして全員が萌えた。」

…北西もマープルも酔いが回っているのか、ドクペを話の合間にグビグビと飲み、そのまま惚気合戦に入る。

「…うわー。おもしろいことになってきたなあ…。」

「本当にね…実に興味深いよ。」

「えッ!?」

アカネがポツリと呟くと、後ろから返事が返ってくる。それに驚いたアカネが振り向くと…そこには、黒髪の少女が面白そうに笑いながら立っていた。

「…あの、アンタは?」

「ん?ああ、オレは咲也。」

「…?あ、一君をここに呼んだ人?」

「そうそう。よろしくね。」

アカネは、咲也ととりあえず握手をし…ふと思った疑問をぶつける。

「…いつからいたん?」

「いや…30分ぐらい前からいたんだけど、皆酔いが回ってたから面白そうでね…見物してたんだ。」

「まあ、確かにおもしろい事にはなっとったけど…。」

アカネは、殴り倒された兵二や、酔いつぶれた録助等モヒカンメンバーを見て呟く。

「…ところで、一君はどこだい?」

「ん？…そう言えばおらへんけど…」

と、そこで咲也がなんとなくそう聞くと、アカネはキョロキョロとあたりを見回す。

だが一の姿は見当たらず、北西が答える。

「ボスなら、夜風浴びに行っただぞ。」

「ふん…懐かしの学園都市だから、感傷に浸ってるのかな？」

咲也はそれだけ聞くと、興味を無くしたように外を見る。

「…最近、怪人も出て物騒だからねえ…無事だといいいんだが。」

「怪人って…ドーパント？」

咲也がポツリと漏らしたその言葉に、アカネは言う。

「いや、もっと別らしいけど…」

「ふうん…。」

アカネも少しは酔っているのか、咲也がドーパントの事を知っているのも気にせず、適当に返事をする。

「その件で呼んだのに…全く、なにをしてるのやら。」

咲也は、少しだけ心配そうな顔になり…外の月を見上げるのであ

た。

午後7時。学園都市・とある公園。

一とウヴァは、【カレ】から出て今はとある公園でベンチに座っていた。

ちなみに、ウヴァはあの後渡されたパンク風の服に着替え、もらった服は全て紙袋に詰め込み、一が持っていた。

…ついでに言うなら、一に借りたコートもそのまま羽織っている。

「さて…だいぶ暗くなってしまいましたが、大丈夫なんですか？」

「あ、大丈夫、です。」

ウヴァは、一の隣で近くの自販機で買った【樹液ココア】を飲みながら、その言葉に答えた。

「皆、しっかりしてるし…ちゃんとオレが帰って来るって分かってるから。」

「…そうですね。」

一は、そう言うと自分も自販機で買った【半熟カフェオレ】を飲む。

「…あ、私が送り返しましょうか？」

「え？…いいんですか？」

「その申し出に、ウヴァは不思議そうな顔になる。

「ええ。一応あの脂肪は二、三カ月動けないレベルの傷は追わせましたが…一応心配ですし。」

「…ありがとうございます。」

「いえいえ。紳士として当然のことです。」

ウヴァが素直に礼を言うと、一はにっこりと笑顔で微笑む。

「では、行きましょうか。」

「…はい。」

「の差し出した手を取り、ウヴァは立ち上がる。

同じ頃。学園都市・とある廃墟。

「…メズール。ウヴァ、帰ってこない、なぜだあ？」

「さあなぜかしら…いいクヌギの森でも見つけたんじゃないかしら？」

「…さすがにそれは無いと思うよ、メズール。ほら、ガメルも信じそうになってるし…。」

その廃墟には、三人の少女がいた。

一人は灰色の長髪に犀サイを彷彿とさせる飾り、上半身は黒い包帯の様な物で巻かれているが、下半身は象の様な威圧感のあるズボンを履いている小学校中学年くらいの少女。

もう一人は、青がかった灰色の髪に鯨の様な飾り、足元まで届く青いロングマントの中の上半身は灰色の少女と同じ黒い包帯の様な物で巻かれている。だが、下半身は鮎の様な吸盤模様の黒いスリットスカートの20代くらいの女性。

最後の一人は金髪のウェーブにネコ科の帽子に虎を思わせる黒いジャケットアーマー。そして下半身には二人と同じ黒い包帯が巻かれている女性。

…しかして、その外見と力は一致しない。

灰色の少女の真名は【ガメル】。欲望を司る者、グリードの一人にして、【重量生物の女王】。

蒼色の女性の真名は【メズール】。欲望を司る者、グリードの一人にして、【水生生物の女王】。

黄色の女性の真名は【カザリ】。欲望を司る者、グリードの一人に

して【猫の女王】。

三人は、まだ帰ってこない仲間の一人…【昆虫女王】、ウヴァを心配していた。

「ウヴァ、よく一人で出かける。でも、いつも早く帰ってくる。」

「そうね…いくらなんでも遅すぎる気はするけど。」

「まさか、最近出てる僕等の偽物っぽいのにやられちゃってたりしてね？」

カザリが、冗談交じりでそう言うと…ガメルが泣きそうな顔になり、メズールがカザリを窘める。

「ウヴァ、帰って、こない？」

「ああ、大丈夫よガメル。きっと帰ってくるわ…カザリ、貴女ガメルを泣かせないで。」

「…ごめん、冗談だったんだけど…ああ、ガメル泣かないで、ね？」

カザリとメズールは、あわあわと泣きそうになるガメルを必死で宥めるのであった。

午後7時30分。学園都市・とある道路。

「……」から辺ですか？」

「あ、そうです……。」

ウヴァは、一と手を繋いで一緒に通りを歩いていた。

はたから見ると、兄と妹が仲良く歩いているだけなのだろうが、ウヴァはまるでデートをしている気分になり、もう頭の中はお花畑だ。

「……あ、そうだ……」さん。」

「ん？なんですか？」

ウヴァは、その時何かを思いついた様に顔をあげ、一に声をかける。

一がウヴァの方を向くと……ウヴァは、自分のポケットから一枚の銀色のメダルと緑色のメダルを差し出し、渡す。

「これ、そこまでいい物じゃないけど……今日のお礼。」

「これはこれは……しかし、いいのですか？これは貴女があ脂肪から守っていたもので……」

一は、その銀色のメダル……セルメダルと緑色の鍬形が刻まれたメダル……クワガタ・コアを握りしめ、ウヴァに問う。

けれど、ウヴァはふるると首を振り、一に笑いかける。

「いえ、一さんのおかげで守れたものですし…どうぞ、持って行って下さい。」

…ウヴァにとって、いやグリードにとってコアメダルとは生命線。

気安く人にあげるなど、しないはずなのだが…恋は盲目である。

「…お嬢さんから、ただもらってばかりと言うのは…紳士的ではありませんね。」

と、一は突然そんなことを言い出す。

「…コート、もらったから、お返しです。」

「いえいえ。あの場合コートを上げないなど…紳士でなく、男として駄目なものです。」

一は、そう言うと、何か思いついたように指を鳴らす。

「そうですね…なら、代わりにこれを差し上げましょう。」

一はそう言うと、かぶっていた帽子をとり、ウヴァにかぶせる。

「そのコートだけではなんだか似合いませんし…これでちょうどいいですかね。」

一はにっこりと笑い、ウヴァの頭を帽子でしに撫でる。

「…ありがとうございます。」

ウヴアはそう言って笑顔になり、駆け出す。

「…ウヴアさん？」

「ここまで来れば、もう一人でいけますから！また、メールして下さいね！！」

ウヴアはそう言って手を振り、タタタと駆けていく。

「…ええ。お元気でー！またきたら、デートでもしましょうね！」

そう一が言うと、ウヴアが一瞬ガクンとこけた様に見えたが…ウヴアは手を振って駆けていった。

「……………さて。」

一は、ウヴアの姿が見えなくなるまで見送ると…鋭い視線になり、ステッキを音を立ててアスファルトに突きつける。

「…貴方は、いったい何のご用で？」

一がそう言って振り向くと…そこには、逆さになった鍬形の様な角カマキリの複眼、そして上半身にカマキリを模した釜と鍬形の様な鎧を着、下半身は黒い包帯などで覆われたミイラの様な色の肉体がのぞいている、怪人がいた。

オレの…！！コアだ…！！

その怪人…【昆虫の王】ウヴアは一に襲いかかる。

「……………フン。」

だが、一はその攻撃をあつさり避け、足にステッキを引っ掛ける。そのまま、自分の襲いかかった勢いでウヴァは転ぶ。

「…ドーパントではないようですが…本気で、まいりましょう。」

一は、そう言うと服の内側からドゥーツドライバーを取り出し、腰に装着する。

「マープル。急にすいませんが…Maximumを使いますよ。目の前に、ヤバイ奴がいるのです…!!」

「ふえ？」

一はドライバーを通じてマープルにそう言うと、服の中からメモリを取り出し、そのメモリを押し。

…廃墟で酔っていたマープルは、突然腰に現れたドライバーに驚くが、とりあえず一に言われたとおりメモリを取り出す。

POISON!

ASH!

「…行きますよ。」

「はい。」

一は、ポイズンメモリをドライバーのマキシマムスロットに挿入し、マキシマムドライブを発動する。

POISON!MaximumDrive!

マーブルも、アッシュメモリを一同じようにし、マキシマムドライブを発動させる。

ASH!MaximumDrive!!

マーブルはそのアッシュメモリを抜き、ドライバーの右スロットに入れる。すると一際強い灰色の光が灯り：マーブルごと、その光が消える。

そして、一は自身の紫電が奔っているメモリを抜き：そして、次の瞬間一のドライバーの右部分に灰色のメモリが転送される。

「……………」

一は、ウヴァを睨みながらその灰色のメモリをドライバーに押し込み、自身もポイズンメモリをドライバーに挿入し、ドライバーを操作する。

MAXIMUM・ASH!MAXIMUM・POISON!

その電子音声が鳴ると、一の体は灰色の風と紫電に包まれ：次の瞬間、背中からガラス細工の様な灰色の翼と、悪魔の様な紫の翼が生え、天使と悪魔を半分半分にした様な歪な姿：仮面ライダードゥーツ・マキシマムに変身する。

「…ああ、なるほど。」

ウヴァが周りを見ると…そこには、すごくぐったりした様子のカザリと、嬉しそうにしているガメルがいた。

「一体、何してたのよ…と言うか、そのコートと帽子はなに?!」

「あ、これか?…実はな…」

ウヴァはコートと帽子をもらった経緯を言おうとするが…一の顔とデートした時のことを思い出し、ニヤニヤする。

「…本当にどうしたのよ。」

「…なあメズール。」

「なによ。」

「運命の赤い糸って…信じるか?」

ウヴァが、熱っぽい顔でそう言うと…メズールは、はっと気がついたのか、ウヴァに詰め寄る。

「貴女…まさか!誰、ねえ誰なの!?!教えなさい、教えるのよ!?!」

「え〜?誰って言われても……っふふふふふ〜」

メズールは、鼻血を垂らしながら血走った眼でウヴァに詰め寄るが…ウヴァは、一の事を思い出し、もう頭の中は完璧に春真っ盛りの

お花畑である。

メズールが鼻血を垂らしながら詰め寄り、ウヴァはクネクネと頬を染めながら嬉しそうにしている…まさにカオスである。

「…カザリ、二人とも、なにしてる？」

「……君がまだ知らなくていいことだよ、ガメル。」

ガメルが、不思議そうにそれを見ているが…カザリは、二人にドン引きしながらも、「自分がすっかりしなきゃな…」と再認識するのだった。

ちなみに、この後話を聞いたメズールがテンションをあげ…ウヴァはカザリにePADの使い方をしっかりと聞き、ひらがなばかりだが、一へメールを送ることに成功したのだった。

学園都市・とある道路。

『ハッ！！ハアアッ！！』

ドゥーツは、灰で作られた剣、アッシュセイバーを構えてウヴァを

何度も斬り付ける。

ガアツ…!!

ウヴァは、その攻撃をまともに受け、セルメダルを撒き散らしながら倒れる。

『…油断はしませんよ…?』

ドゥーツはそういつと、メモリをチェンジする。

MAXIMUM・MAGICIAN! MAXIMUM・SPIR

IT!

そして、電子音声が鳴ると、ドゥーツは黒のマントに赤い装飾の銀色の右半身、純白のマントに重装甲の左半身を持つマキシムマジシャンスピリットになると、空中から凶悪な外見をした大槌…スピリットブレイカーを手に取る。

『塵も残さねえ…!!』

ドゥーツは一の意識でそういつと、スピリットブレイカーを槍の様に構え、ドリル部分でウヴァを勢い良く突き上げる。

ギアアアアアアアアアアアアツ…!!…!!…??

ウヴァは苦痛の悲鳴を上げながら、ジャラジャラと体であるセルメダルを溢していく。

『テメエ…ドープアントじゃねえな…?』

ドゥーツは、訝しげにそう言うと、もう一度ウヴァを突き上げ、距離をとる。

ウヴァは勢いのままに吹き飛び、道路にばったりと倒れる。

ぐうつ……ッ！俺の……コアを……！！

だが、ウヴァは体を痙攣させながら立ち上がり、ドゥーツに手を伸ばす。

『ッ……？なんです、こいつ……？マープル、こいつを検索して下さい。』

『……………。』

『……マープル？』

一はマープルに問いかけるが、マープルの返事はない。それを訝しげに一がまた問おうとすると……その時。

『……………ッ?!ぐあぁっ!?!…!』

ドゥーツは、突然横から吹いてきた突風に吹き飛ばされ、近くの建物のガラスに叩きつけられる。

……………。

『……新手か……!?!』

ドゥーツがその風の吹いてきた方向を見ると、そこには猫の怪人の様な物が立っており、冷たくウヴァとドゥーツを見つめていた。

『ッ…マーブル、速く検索を…』

一の意識がマーブルに再度そう言つたと…マーブルの声が聞こえる。

『…ふにゃ〜』

『…は!?!』

マーブルの、その気持ちよさそうな声に一が声を上げると…がクンと右半身が重くなる。

『え、ちょ、マーブル!?!どうしました!?!』

『にゃ〜……すっごいしゅわしゅわ飲んでたら、いい気持ち〜』

『…すっごいしゅわしゅわ……って、強炭酸ですか!?!誰が持ってきた…まさか!?!』

一の脳裏に、意地悪そうに笑う銀髪の少女の姿が浮かぶ。

『……お前か咲也アアアアア!?!』

『えへへへへ〜』

一が叫び、マーブルが楽しそうに笑っていると…目の前でその猫の怪人…カザリアナザーはウヴァを腋に抱え、そのままどこかに飛び去っていく。

『あ、待て！……って、無駄ですか……。』

一は、疲れた様にそう言っていると変身を解き、ゆっくりと立ち上がる。

「……今の、なんでしょうね……風都以外のドーパントは基本的にあの人が倒してるはずですけど……」

一は呟きながら軽く伸びをし、その人物の事を思い出して背筋を震わせる。

「咲也が言っていたのも、これ関係ですかね……ハア。」

また厄介事に巻き込まれた、とすぐに一は理解し、ため息を漏らすのだった……。

DOTW&mp・禁書目録サイド・第三話

早朝6時 音霧探偵事務所。

「ん…………む？」

一は、まだ覚醒しきっていない頭を上げ、ゆっくりと上半身を起こし、あたりを見回す。

そこはいつもの事務所ではなく、一瞬疑問を覚えるが…すぐにその場所を思い出し、納得する。

「ああ…………学園都市でしたね…………。」

一はその見覚えのある場所…音霧探偵事務所を見て、ひとり呟く。

「……………あれ、でもなんでここに…？」

一はまたそう言つと、昨日の記憶を掘り返す。

昨夜、一は念のため戦闘した場所を調べ回つたが…なにも手掛かりはなく、一度帰つたのである。

そして…一が廃墟に帰ると、そこには酔いつぶれたモヒカン部隊&mp・録助&mp・兵二がおり、その隣では顔を真っ赤にして

わけのわからないことを言い合うマープルと北西の姿。

その隣にはニヤニヤと楽しそうにそれを見つめる咲也とその隣でぐでぐでんになったアカネ。

とりあえず一は咲也に事情を聞いて咲也を拳骨（能力補助あり）し、マープルと北西を必死で宥める。

その後、酔いつぶれた男共を能力使って適当に廃墟の隅っこにまとめ、北西とマープル、ついでにアカネを音霧探偵事務所に放りこんだのだ。

そして結局一は音霧探偵事務所で眠りについたのだった。

「……………しかし、前の私の寢床はもう使われてるからって…
なんで事務所が一番小さいソファなんでしょう。」

一はそう言って立ち上がろうとする…と。

ふにゆり。そんな擬音のしそうな感触が手に伝わり、一がクツションでもつかんだかとそこを見ると…

「……………んう……………」

「…………………………」

マープルが一の隣で、スヤスヤと気持ちよさそうに眠っていた。一はそのマープルの胸をつかんでいたのだ。

それを見た一はピシリと固まり、その体勢のまま動かなくなる。

「……………ん…？いーちゃあん？」

と、さすがにずっと胸をつかまれていれば気付くのか、マーブルは目を覚まして一を見上げる。

「……………あ、おはようございます。」

声をかけられ、ようやくフリーズしていた脳を再起動し、一は言葉を返す。

もちろん、パツと手はすぐに離れた。

「…頭痛いです。」

「昨日飲みすぎましたね…強炭酸をあれだけ飲むからです。」

マーブルは米神を押さえてそう言うが、一はため息をついてそう返す。

「私、もうちょっと寝てますねえ…。」

「はいはい…おやすみなさい。」

マーブルは頭痛と睡魔の二つに一気に負け、パタリとソファに倒れ込み、またくーくーと可愛らしく寝息をたてて眠り始める。

「……………起きますか。」

一はマーブルが完全に眠ったことを確認すると、自分にもたれかか

る形だったマールブルを起こさない様に立ち上がり、体を伸ばす。

…内心ものすごい勢いで鼓動を鳴らす心臓を必死に抑えようとしながら。

「……………もつたいない、そこで襲うくらいの度量はないのかい？」

「…なに勝手なこと言ってんです、貴女は…。」

と、そこで突然後ろから声をかけられ、一はゆっくりと振り返って言う。

「…まあ、それが出来ないから君…なんだろうけどね。」

「貴女が何を言いたいのかは聞かないでおきますよ…。」

声の主…咲也はニヤニヤと楽しそうにしながらモーニングコーヒーをすすする。

「とりあえず…紅茶ありませんか？ダージリンとか。」

「ああ、もちろん。君は珈琲より紅茶派だね。流石紳士。」

咲也はそう言うと、棚から紅茶の缶を取り出し、一に投げて渡す。

「どうも。」

一は軽く会釈し…自分の分、紅茶を淹れると一口飲み…一息つく。

「…で。今回私を呼んだのは…なぜです？」

「……………脈絡がないね。もうちょっと雑談を楽しまないかい？」

「嫌ですよ。…昨日、ドーパントではない怪人と戦ったんですよ。」

「……………ふむ。それって、なにか動物の特徴を持っていたかい？サメとかサイとか。」

「いえ、虫でしたよ。頭は逆さにしたクワガタで、下半身に黒い包帯を巻いたのもう一体ドレッドみたいな頭で、パンクロッカーみたいな猫の奴が。」

「……………いきなりそいつと会うのか…君は。」

「…なにか、ヤバイ奴ですか？」

「ああ。今学園都市には、二種類の怪人がいる。メダルで出来た、人の欲望から怪人を生み出す、グリード。欲望から生まれる怪人、ヤミーだ。」

「……………で、そのグリードが…私が出会ったのですか？」

「ああ。虫系幹部のウヴァと猫系幹部のカザリだな。」

咲也はそこまで言うと、一口珈琲を飲む。

「……………でだ。一君には、今回ヤミーも関係してるはしてるけど…ドーパントを倒して欲しい。」

「…学園都市に出たんですか？」

「ああ。ほら。」

咲也は机の上にあつた新聞紙を一に投げて渡す。

そこには、『怪奇！？赤い鳥の怪人が飲食店やアイス店を襲う！？』
という内容のニュースが記載されていた。

「……なるほど。ですが、そのヤミーという怪人の可能性は？」

「いやない。今のところ鳥のヤミーを作れるグリードは活動不可能
なんだ。だから、その場合はドーパントだ。」

咲也がそう断言すると、一は帽子を押さえ、ため息をつく。

「……一応、風都以外のところにいるドーパントはあの人が退治して
るはずなんです……」

「あの人って？」

咲也が聞くと、とたんに一は顔色を曇らせる。

「……………人類最強の赤色です。」

一はあの人類…いや、生物最強とも言える一人の女性の事を脳裏に
浮かべ、背筋を震わせる。

「?…よく分からないけど、まあいい。で、今回の依頼は一つ。」

咲也はそう言うと指を立てる。

「学園都市で暴れているドーパントを捕まえ、メモリを破壊してくれ。」

「了解しました。」

「がそう即答すると…咲也はため息をつく。

「…どうしました？」

「……………一応、君もそれで喰っているのなら、報酬くらいは聞きたまえよ。」

「貴女にそう言う事を言われるとは思いませんでしたね…。」

咲也のため息交じりのその言葉に、一は苦笑する。

「貴女と一緒に暮らしてた間、基本的に私が経理とかしてたでしょう…。」

「…別に、私はそれ以外をしてたからいいだろう。」

一が言い返すと、咲也は視線をそらして言う。

「……………料理、洗濯、掃除、裁縫…全部私がやってたんですよ？あの麻理沙さんとかいう人がいなければ貴女生活できないですよ…。」

「失敬な。私だって一応できるさ。ただ、やらないんだ。」

「…やらないは出来ないとそこまで変わりませんよ。結局何もしてないのは同じですから。」

一が笑いながら言うと、咲也は話を変える様に声のボリュームを少しあげて言う。

「兎に角！今回の報酬は昨日マーブルちゃんから色々欲しい物がある、と聞いているからそれをマーブルちゃんに渡す！いいね？」

「…了解です。」

咲也が誤魔化すようにそう言うのと、マーブルがと言うところで一は引き下がる。

そして、一は立ち上がって帽子の位置を直し、伸びをする。

「では…とりあえず、朝も早いですが行ってきます。咲也、貴女は私が調べている間、気休め程度でいいので、【仮面流^{マスク}】の情報もつ使って怪人の目撃情報とかを調べて下さい。で、情報が集まったらマーブルに検索を。」

「了解した。」

咲也がそういうのを聞き、一は事務所のドアを開けて外に出る……。

「……………ふむ。」

一は事務所を出た後、一人学園都市を回り、情報を集めていた。

だが…………スキルアウトの集団や、適当な情報屋を探しても、まだ寝ているらしい。

数人くらいは情報屋を見つけたが、そこまで情報を持っていなかった。

「…もうちょっと後にしましょうかね…。」

一はそう呟きながら自販機で買ったパンをパクつきながら、適当にどこかで時間をつぶそうかと考える…と、その時。

「……………む？」

一の目線の先に、ゴーグルをつけた少女の姿が見え…そして、路地裏へふつと消えていく。

「…あれって確か…常盤台の…。」

そのゴーグル少女の服に見覚えがある一は、お嬢様校の生徒がこんな平日の朝になぜ…と考えた一は、なんとなくでその少女が入った路地裏へと向かう。

学園都市・路地裏。

「……………」

まだ朝も早く、薄暗い路地裏…そこに一人のゴーグルをつけた少女がいた。

…ニヤ、ニヤー。

そして、その足元には何匹かの猫がおり、少女は猫にエサをやりながら優しい表情で猫を撫でていた。

「いいですね…よしよし。」

その少女に猫は懐いているようで、何匹かは自らすり寄って気持ちよさそうに撫でられている。

…ところで、この少女を追った一はと言つと…。

「……………ふむ。」

その光景を路地裏を覗き込んで見ていた。しかもご丁寧に自分の体から出る電磁波をギリギリまで抑え、隠密使用だ。

「……………第三位ではないですねえ…。」

一はそう呟き、少し引っかかるも行くこうとした…が。

「ニヤー。」

「…む？」

鳴き声が聞こえ、一が足元を見ると…そこには一匹の子猫がおり、一の脚にすり寄ってきている。

「シュレ、どうかしましたか………」と。

「……………どうも。」

と、その猫の鳴き声に気付いたのか、少女はこちらを向き…一と目が合う。

一はなるべく紳士的に挨拶するが…少女は無表情のままだ。

「…貴方は誰ですか、とミサカは疑問を投げかけます。」

「これは失礼。初めまして、私はしがない探偵の左乃宮一、と申します。」

少女…ミサカは一に相当と、一も優しげな口調でそう返す。

「…ご丁寧に。ミサカはミサカ11976号と申します。とミサカは挨拶をします。」

…その言葉に一は訝しげな表情になる。11976号…何かの暗号なのだろうか？

一はそれについて質問しようとした…が、その言葉を言う前にミサ

力は不思議そうな顔になり、一にまた問う。

「…なぜ探偵が私の後をつけたのか、とミサカは疑問に思います。」

「あ、いえ…。」

と、一はそこで少し考える。

こんな分かりやすく制服を着ているのに学校に行っていない。それはなにか事情があるのではないか…

そこまで考えると、さすがに普通にその事を聞くのは紳士としてどうなのか…その考えが頭の中をめぐる。

なにかいい訳をする必要が…と、そんな考えが頭によぎったその時、少女が手に持っていた紙パックのミルクを見て、一言言う。

「その猫にあげるミルク…人間用ですから猫の体に悪いですよ？」

「……………本当ですか？とミサカは確認を求めます。」

「ええ。普通の猫でも危ないですが、子猫だとなおさら…下痢起こして、最悪死にます。」

……………ちなみに本当のことである。

人が牛乳を飲んで下痢になることもある様に、猫も同じで、牛乳を飲んで下痢になる猫がおり、外来種の猫に多い。

特に子猫の場合、下痢が重症になることもあるので、あげないほ

うがよいのだ。

子猫は、牛乳の酵素を分解するラクターゼという物質が分泌されても離乳後は10分の1に減ってしまうことが原因である。

…ただし、全く平気な猫もいるにはいるであるが。

「……………どうしましょう。とミサカは狼狽します…。」

「…水で薄めたり、猫用ミルクだったりすれば基本的には大丈夫ですよ。」

「…猫の事詳しい様ですが…色々教えて下さい。とミサカは懇願します。」

ミサカは、一にペコリと頭を下げる。

「いいですよ。…とりあえず、今はこのくらいで…。」

一は持っていたミネラルウォーターのボトルを手に取り、紙パックのミルクと混ぜて薄くなったミルクをミサカが用意していたらしき皿に入れる。

ニヤ。ニヤニヤー。

それを地面に置くと、猫は数匹集まって皿のミルクをピチャピチャ舐め始める。

「…喜んで飲んでいますね…。」

「ええ。このくらいが猫にはちょうどいいですよ。」

「はミルクを飲んでいる猫を撫でながらそう言い、ミサカも無表情ながら嬉しそうな声で言う。」

「…そう言えば、左乃宮さんはなぜ電撃使用エレクトロマスターで大能力者なのに…動物に嫌われないんですか？」とミサカは素朴な疑問を投げかけます。」

「む？ああ、そのことですか…。」

「一様なレベルの高い電撃使用は体から本人も気づかない様な微弱な電磁波を発している物がおおい。」

「一は知らないが、第三位である御坂美琴も体からの電磁波で猫に嫌われることについて少し悲しんでいる。」

だが、一の場合は少し特殊なのである。

「私の能力名は、超活性化ビルドアップと言うのですが…それは、身体能力をあげたりするだけのそこまで強くない能力なのですよ。」

「…本人はこう言っているが、実際のところ本気の出力を出せは変身せずともパンチ力1t程はあり、十分超人なのであるが。」

「…ですが…それには代わりに汎用性がありましてね。私は体内電流体内電流の操作もできるのですよ。つまり…電磁波も多少は操れるのです。」

「一はその大能力者にふさわしい電圧、電力を全て身体能力の強化に回している訳ではない。」

その高すぎる身体能力に見合う様に感覚神経や他の神経を強化し、バランスをとっているのだ。

しかし、一が本気の力を出した場合、多少の漏電が起こる。

その場合、一の体から特殊な電磁波が発生し…体内電流が異常をきたし、一の体自体危険にさらされるのだ。

そこで自身の肉体を守るため、電磁波操作の能力があるのである。

「で、猫の電磁波のパターンを覚えて、そのまま体から放出すれば猫からは同族の様に思われますから、OKです。」

つまり、簡単な変装の様なものである。動物などは目に見えない匂いや電磁波…そういうもので判断することが多いので便利なのだ。

「よければ、少しくらいお教えしましょうか？同じ電撃使いなら多少はいけるでしょうし…上手くいけば猫で包まれるほどに好かれるか」是非お願いします、とミサカは懇願します。「…分かりました。」

言いきる前にペコリと綺麗に頭を下げたミサカに一は少し困惑するが…優しい笑顔で頷く。

「では、失礼…。」

そう言うと一はミサカの額に手を当て、電磁波を流し始める…と、その時。

「アッ………」

「え？」

バチリと音がし、一の手は弾かれ…ミサカはパタリと倒れる。

倒れたミサカに、猫が心配するように集まるが…一は最初の体勢のまま動かない。

「……………」

冷や汗をかきながらも、一はとりあえずシケードフォンに手をかける。

電話帳から、力行を開き、『球磨川』『ケ原さん』等をスクロールし、『木上』の項目を見つけ、電話をかける。

「…あ、録助か？なんか女性が電磁波流したら倒れた。…違う違う、スタンガン仕様じゃない。…ああ、とりあえず迎えにこい。場所はお前がたどれば分かるだろ？今の俺様の位置な。じゃ。」

一はそれだけ言うと電話を切り、少女に向き直る。

「……………なんということでしょう。」

……………なお、ミサカが倒れた原因がミサカネットワークと猫に好かれる電磁波がお互いに中和され、綺麗さっぱり色々と記憶を失ったことだということは…今のところ、誰も知らない。

30分後・学園都市・大通り。

「……第三位にも妹いたんですねえ……。」

「は、先程のミサカ11976号と名乗った少女の事を思い返していた。」

「御坂」と言う名前と言い、あの容姿と言い……どう考えても第三位の御坂美琴と関係あることは間違いない。

……まあ、それより問題な事があるのであるが。

「……録助も電磁波の異常なしと言ってましたし……平気ですよね。」

「が自分自身にそう言い聞かせながら歩いている……と、その時。」

「……む？」

「の目線の先に、ピンクの髪をした童女の姿が見え……その姿に、
「は見覚えがあった。」

「……いや、さすがに成長してますよね？……あの頃と全く変わらない、なんてことは……。」

「は本気で不思議そうに考えながら、その童女に話しかける。」

「あの……すいません。」

「はい？」

童女は、一に声をかけられると振り向き…一の顔を見ると、一瞬、呆けた表情になる。

「……………お久しぶりです。先生。」

「……………左乃宮ちゃん…ですか？」

一が優しい表情で声をかけると、その童女…月詠小萌は呆けた表情のまま、そう聞き返す。

「はい。ご無沙汰です…たまにしか連絡しないですいません、忙しかったもので。」

一がそういうと…小萌は一の顔を見て笑顔になり……………目に涙をため始める。

「え、先生…？」

「左乃宮ちゃん…左乃宮ちゃああああん!!」

小萌は瞳を売るつるとさせながら一に抱きつき、そのままわんわんと泣き始める。

「え、先生、あの!？」

一はその小萌のいきなりの行動に慌てふためき、あたふたとするが…はっと、周りからの視線に気づく。

.....。
朝なので、人通りも多い大通り。その中心で童女を抱き、その童女は泣いている.....

即座にアンチスキルを呼ばれてもおかしくはない。

「.....。」

一は周りからのその攻めるような（誤字にあらず）視線のなか、数秒硬直し.....小萌を抱きかかえ、走り出す。もちろん、能力補助のおまけつきだ。

「.....なぜ泣きだしますか、貴女は!!！」

「あううう.....久しぶりに会えて、それに立派な大人になってるなんて.....左乃宮ちゃんじゃないみたいですよ.....!!！」

「超失礼な!!！」

二人は、そんなことを言いながら学園都市の大通りを走っていった.....。

同じ時間帯 学園都市・路地裏。

その路地裏では、三人の男がガツガツと端の方が欠けた大皿でカレーを食っていた。

「……………ウメエな…さすがポレポレのカレー。」

「兄ちゃん、よかったな…俺ら、もう毎日三食パンの耳と賞味期限切れの弁当じゃない物を喰えるんだから！」

その三人の中の二人…赤羽三兄弟の二男と三男、アカハ ヨハク赤羽世羽玖とコソト近探はカレーをがつつきながら、嬉しそうにそう言う。

だが…その二人とは対照的に、最後の一人…赤羽三兄弟の長男である赤羽高人は黙ってカレーを食べ…そして、カタンと皿を置く。

「…なあ、お前ら…これで、満足か？」

高人のその言葉に、二人はきよとんとなり、聞き返す。

「…どういうことだ、兄貴？別に、俺達は人並みの食事が出てるだけでも結構満足だぜ？」

「ああ。今までがマジひどかったから、今みたいに食うのに困らないのはいいことだろ？」

二人のその言葉に、高人は懐から赤色のメモリを取り出して言う。

「……………今の俺達には、これがあるんだぞ？……………もっとデカイことしようじゃねえか……………」

その言葉に…二人はようやく合点が行ったとばかりにニヤリと笑い、それぞれメモリを取り出す。

「なんだ、そういうことかよ………だったら、一暴れしようぜ？」

「銀行でも襲ってみるか？」

二人が笑うと、高人もニヤリと黒い笑みを浮かべ…メモリのスイッチを押す。

H A W K !

「今の俺達は…やりようでは超能力者でも倒せるんだ…いけるぞ。」

そのまま高人が手首にあるコネクタにメモリを挿そうとすると…慌てた様に世羽玖と近採が止める。

「おいおい、待ってくれよ兄貴！」

「また兄貴だけがやるのはダメだろ…俺たちにだってやらせるよ。」

二人はそう言うと、それぞれのメモリを取り出してスイッチを押し…そのままそれぞれ右手首、左手首にある生体コネクタにメモリを挿す。

P E A C C O C K !

C O N D O R !

ガイアウィスパーからその音声が鳴ると、二人は真っ赤な羽毛と炎

の渦に包まれていく。

そして、世羽玖は赤を基調とした瑠璃色の強靱な体を持ち、背中部分には巨大な扇子の様な物をもった鳥の怪人…ピーコック・ドーパントに。

近採は赤色の腕と一体化した羽を持ち、手足には鋭い鉤爪、腰には鉤爪型のナイフを二本装着しているガルーダの様な怪人…コンドル・ドーパントに。

それぞれが、変身する。

「んじゃ、銀行でも襲つか。世羽玖、俺はテレポートして銀行の中から金奪つから、お前は暴れ回っていいぞ。」

元々の近採の能力は異能力者^{レベル2}のテレポートである…が、素早く空を飛び回るコンドルの記憶をドーパント^{レベル4}となることで手に入れ、そこからすでに大能力者に匹敵する力を持ったのだ。

「了解…んじゃ。」

と、そこでコンドルがそう言うと、二人の姿が一瞬ぶれ…次の瞬間には、その姿を消していた。

「……………頑張れよ、我が弟達……………」

高人はそう笑いながら言う……………自身も立ち上がり、ゴキゴキと首の骨を鳴らす。

「俺も…………やるかな。」

高人がそう言うと、その体が無数のセルメダルに包まれていき…次の瞬間、その姿は怪人へと変わる。

その姿は高人がもつホークメモリによる物ではない。

全身、小汚い黄色と黒のマダラ模様の毛皮に覆われ、腰にはボロボロの黒の腰布に隠れて盗賊の様なナイフやロープが。

そして、頭部は犬にも見た猫科の獣…ハイエナの毛皮をそのまま使った被り物の様になっており、顔は目をつぶった人間の様な物に変わっている。

「……………モット、財ヲ…!!」

高人が変貌したその怪人…ハイエナヤミーは、先ほどまでの理性的な人間の声から、まるで欲望を丸出しにした猛獣の様な声を出し、棒立ちのその体制のまま一気に跳び上がり、一瞬のうちにその姿を消した。

そしてその場所には、喰い散らかされて汚れたカレー皿と、獣臭…それに少しだけの真っ赤な羽毛だけが残ったのだった。

午前8時30分 学園都市・とある喫茶店。

一と小萌は白い椅子に腰かけ、テーブルにおかれたケーキと紅茶を手で雑談をしていた。

「だから先生は昔からすぐ泣くのを何とかしてほしいんですよ……」

「せ、先生は大人ですよ?! そんな簡単に泣いたりしないのです!」

二人はあの後責める様な視線から逃げ切り、その後適当な喫茶店に入り今に至る。

「……………と言つても、さっきのことはもちろん、私が敬語覚えて普通に授業受ける様になった時とか、卒業の時とかも号泣したじゃないですか……」

「あ、あれは仕方ないですよ! 毎年毎年迷惑掛けてたのに、卒業する時に限って「ありがとう」なんて……左乃宮ちゃんは教師殺しなのです!」

……一が学園都市にいたころ、もちろん高校に通っていた。

しかし、そもそも一が最初に学園都市に来た理由は旦那…クラサカダンジ鞍坂鍛治に「人生経験を積むのも紳士ですよ?」と言われて明日のパンツや宿のあても無く適当に放りこまれたのが原因である。

……………だが、そんなあても無く放りこまれては流石の一も怒りは覚える。しかもそのころはまだ紳士と言いつらい半チンピラ時期だったのだ。

その結果荒れに荒れ……一度は咲也に拾われ、家事全般をこなした

がら高校にも通っていたが…いい加減、その学生にして家政婦の様な生活に嫌気がさし、授業をさぼる、家出をする、とやりたい放題やっていたのだ。

その時につくったのが、【仮面流^{マスク}】でもある。

そして、そんな荒れ放題だった一を何とかしようと思死で更生させたのが…黄泉川、災誤…そして、小萌なのである。

「あの頃は大変でしたよ……災誤先生と互角以上に戦う生徒なんてなかなかいませんでしたからねえ。」

「ああ…でも、特撮ヒーロー並に身体能力あげた私と戦えるって…何者なのかいまだによく分からないですよ、あの先生は。」

一はそこまで言うと、テーブルの上の紅茶のカップをとり、一口飲む。

「…あ、そうです。先生に聞きたい事があるのですが。」

「ん、なんですか？」

一は思い出したように小萌に話しかける。

「実は…」

と、一がそこまで行った時…近くの道路で爆発が起こる。

「ッ…!?!?」

一は即座に反応し、能力を発動して小萌を庇うように抱き締める。

「きゃああっ!?!」

一は小萌と周りの人々の悲鳴を聞きながら必死に小萌を抱きしめ、爆風から庇う。

そして、数分たって爆風が収まると一は抱きしめていた腕を緩め、小萌の顔を覗き込んで問う。

「…先生、怪我はないですか?」

「は、はい…けど、今のは?」

小萌が撒き上がった煙で軽くせき込みながらそう言うと、一はあたりを見回してステッキを構える。

「…どうやら、どこぞのバカが銀行を襲ったようですね…」

「能力者ですか…この前も虚空爆発の事件があったのにまた…。」

小萌がそついうのを聞きながら一は立ち上がり、小萌に向けて叫ぶ。

「先生、ここにいて下さいね!」

一はそう叫ぶと爆発が起こったところへ走りだした…!

同じころ 学園都市・とある道路。

その日、当麻は幸運だった。

昨日とは違ってビリビリにも追いかけられず、タイムセールでは偶然近くで安売りが始まり、主婦のプロレス技を喰らうことなく購入ができ、更には500円拾ったのだ。

珍しく降ってわいた幸運に喜びながら、当麻は生活費を引き出すため、銀行へ向かっていた。

「ふんふん」

機嫌よく、いつもはしないであろう鼻歌を歌いながら、当麻が歩いていると…眼の端に、二人の男女が止まる。

それは長身赤髪で煙草をくわえた男と、片方を大きく切り裂き、左右非対称になつた服を着た女。

当麻もあつた事がある「必要悪の教会」の魔術師…ステイルと神裂だ。

「……ん？」

「よう、ステイル、神裂。奇遇だな。」

と、視線に気がついたのか神裂がこちらを向くと、当麻は気さくに手を振り、近づく。

「ああ……どうも、お久しぶりです。」

神裂はペコリと頭を下げ、ステイルは軽く手を振りかえす。

「どうしたんだよ、二人揃って……また魔術関係でなにかあったのか？」

当麻がそう聞くと、ステイルは頭をかきながら答える。

「いや、そんなことはないが……」

「……ただステイルの煙草が切れて、私が財布関係は完全に握っているので、一緒に買いにきただけですよ。」

ステイルが誤魔化すように言うのを見て、神裂がため息をついて言う。

「……………体に悪いぞ？」

「いいだろ、別に……。」

当麻が呆れ顔で言うと、ステイルはそっぽを向く。

「貴方は何をしに来たのですか？」

「ん？ああ、生活費おろしに来たんだよ。インデックスはよく喰うからな……。」

当麻がため息をついて言うと、ステイルと神裂は自分も同じような

「ぐっ…!？」

その突風に当麻達は何とかこらえるが…周りにいた一般人は風で吹き飛び、転んで倒れてしまっている。

更に、近くにあった銀行やビルの大きなガラスも割れ、その破片が風に乗って飛び散り、辺りは騒然となった。

キヤアアアアツ!!

うおわあああああ!!

負った傷こそ深くないものの、刃を持った破片が飛び散っていると、いう事実で一般人は恐怖し、パニックになっている。

「ッ…なんだよ、また魔術師かなんかの仕業か!？」

当麻が顔を腕で守りながらそう言い、ステイルはそれに叫ぶように答える。

「いや、それはないはずだが…っ!!」

と、ステイルがそう言っていると瑠璃色の怪人はステイルにたった一回のジャンプで近づき、扇で殴りかかる。

「っ…!？」

「ステイル!!」

神裂はステイルを庇おうと走り出す…が、間に合わない。

ステイルは腕を交差させガードするが…当然それだけでは防げない。思わずステイルは目をつぶるが…そこで、なにか音が聞こえてくる。

ASH! POISON!

『オラアアツ!!』

「ギヤアツ!?!」

ステイルがその悲鳴の様な声を聞き、目を開けると…そこには、二色の体をした仮面の戦士が立ち、瑠璃色の怪人を殴り飛ばしていた。

『貴方達、大丈夫ですか?!』

「あ…ああ。ありがとう。」

その仮面の戦士の右目が点滅し、女性の声でステイルに話しかける。

『ああいうのは私達の専門です…貴方方、こういうことには慣れているようですね?』

『はい、パニックも起こしてないし、いたって冷静です。』

仮面の戦士は、次は左目を点滅させ男の声で、そしてまた右目を点滅させて女性の声で言う。

「え…ま、まあカミジヨーさんはこういうの慣れてますけど…。」

『なら、避難誘導お願いしますねっ!』

当麻が答えると、仮面の戦士は瑠璃色の怪人に向かって走り出した。

「え、ちょ!」

「…あいつが魔術か科学か知らないが…今はとりあえず一般人を避難させるぞ。」

ステイルはそういうと、パニックを起こしている人々に大声で避難を呼び掛け始める。

「…助けてもらったお礼ですかね?」

「意外といい奴だもんな…あいつ。」

神裂と当麻はそう顔を見合わせて言うと、自分達もステイルと同じように一般人を避難させ始める…。

DOTW O & a m p・禁書目録サイド・第三話（後書き）

前回登場した、【仮面流】幹部の設定を紹介。

イノウマ
袴馬・兵二

男・19歳

現・【仮面流】の総長。一とは仲が良く、今もよく連絡を取り合っている。

レベル3の風力使い（エアロマスター）。能力名は加速装置ブースト、物体の空気抵抗を限りなく0にし、スピードを上げる。

スキンヘッドに、頭頂部に【仮面流】のタトウー。グラサンと革ジャン、そして筋骨隆々のマッチョマン。
好きな物はプリンとキャンディ。

一の事は「兄貴」、咲也の事を「姉さん」と呼ぶ。

キガミ
木上・録助

男・17歳

【仮面流】の幹部。一の手下であることを誇りに思っている。
レベル2の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は誤電磁波ハルサー、機械に微弱な電磁波を流し、一時的（最大3時間）だけ使用不能にする。

古き良きモヒカンで口癖は「ヒヤッハー！」。

まあまあ筋肉はあるが、どちらかと言うと長身痩躯。モヒカンではあるが、一応ちゃんと学校に通い、成績優秀。服はたいいてい学生服。一ほどではないが、ツンデレ。

イノウエ
猪上・北西

女・20歳

【仮面流】の女幹部。一の手下…と言うより、策士。レベル4のベクトル操作、能力名、正義壁盾イジスを使う。長方形の壁を作りだし、それに触れた物のベクトルを操作できる。

一と対等な立場で喋り、クールビューティ。
眼鏡に黒髪ロング。胸はまあまあ。

DOTW&mp・禁書目録サイド・第四話(前書き)

だいぶお待ちさせてすいません！

それでは、お楽しみください。

DOTW&mp・禁書目録サイド・第四話

「……………なんだ、お前？いきなり邪魔しやがって……………」

『うるせえドーパント…学園都市にまで出やがって…………』

仮面の戦士…いや、仮面ライダードゥーツはそういつと瑠璃色の怪人に殴りかかる。

「ハツ…なんだか知らねえが…相手になってやるよ！」

ピーコック・ドーパントはドゥーツに殴りかかる…………が。

『青いんだよ、ガキがつ…！』

ドゥーツはそう言つとその腕をつかみ、そのまま引きよせて蹴りを喰らわせる。

「がはっ……………！？」

『マーブル、検索をお願いします。戦闘の方は私が何とかしますので…………』

ピーコック・ドーパントが苦しんでいる間に、ドゥーツは距離をとって一はマーブルに語りかける。

『え、大丈夫ですか！？体ガクつと重くなりますけど…。』

仮面ライダードーツは変身者が一人と言う事が最大の利点であり、欠点である。

どちらかが片方でも力を抜けば、ガクリと力は抜けて戦闘力は落ちるのである。

『ええ…久々に能力使うので、平気ですよ。』

『…ならいいですけど。キーワードは？』

だが、一がさらりとそう答えるとマールは反論する気も無いのか、応じる。

『キーワードは…【瑠璃色】【鳥】【扇】。見えるだけの特徴ですが、大丈夫でしょう。』

『では…検索を開始します！』

マールがそういうのと同時に、一の右半身にはガクリと重しが乗った様に動かしづらくなるが……一は、腕から紫電を迸らせ、構える。

『ビルドアップ
超活性化！』

一がそういうと、ドーツの肉体に電流が迸り、一の右半身に力が漲る。

「っ…！？能力者か…！」

『では…^{ビルドアップ}超活性化改め、仮面ライダードゥーツ…参ります。』

「はそう言つと、先ほどと変わらない…いや、それ以上のスピードでピーコック・ドーパントに肉薄し、パンチを叩きこむ。」

「ガッ…!?!」

ピーコック・ドーパントは苦悶の声をあげ、カウンターを仕掛けようとするが…ドゥーツは問答無用と言わんばかりに顔と鳩尾を中心的に殴る蹴るの攻撃を加えていく。

『ドンドン行くぞ…?!』

《GENTLEMAN! SWORD!》

「はそう言つとステッキにメモリを挿入し、ステッキを剣に変化させる。」

『舐めんな、ゴラあ!?!』

一度距離をとると、ドゥーツはステッキで何回も斬り付け、最後に蹴り飛ばす。

「ガッハ…!?!」

ピーコック・ドーパントがまた苦悶の声をあげ、悶え苦しむように膝をつく、ドゥーツはステッキからメモリを抜き、代わりにポイズンメモリを挿入し、ステッキのボタンを押す。

POISON! Maximum Drive!!

『ポイズンスライサー……!!』

一の声でそう言うと、ドゥーツはステッキを正眼に構え、ステッキからは紫の瘴気が立ち上る。

「ひいつ……!?!」

ピーコック・ドーパントはそれに本能的な恐怖を感じたのか、わたしとはいずりながら逃げようとするが……もちろん、間に合わない。

『オラアアアツ……!』

そのステッキを振ると、刃の形をした瘴気が一直線に飛び……ピーコック・ドーパントに直撃する。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……!」

ピーコック・ドーパントは攻撃を喰らい、断末魔をあげると……ゆっくりと地面に倒れ、爆発する。

『……ふん。』

ドゥーツはそういうと、爆発に背を向け、歩き始める。

と、その時マーブルの慌てた様な声が聞こえる。

『い、いーちゃん! 検索終了しました! どうになりましたか!?!』

『…遅いですよ。一応もうマキシマムはしたので、もう安心…』

一がそう言うと、マープルは更に慌てた声で叫ぶように言う。

『倒したら危険です！気をつけて！』

『な…ッ？！』

一がその言葉に聞き返そうとすると…背後から一気に火炎が立ち上り、ドゥーツを吹き飛ばす。

『チッ…！！』

幸い、アツシユのメモリを使っているため、ダメージはないが…爆風に吹き飛ばされ、ドゥーツは体勢を崩す。

『…どういう事が教えていただけますね？』

『はい、あのメモリは多分【PEACOCK】のメモリです！』

マープルがそう言うと、一は首をかしげる。

『ピーコック…孔雀ですか？』

『はい。基本的には扇での火球攻撃と高い身体能力くらいしかないんですけど……一つ厄介なのがあります。』

マープルは嘆息しつつそう言い、説明を続ける。

『孔雀自体は普通の鳥ですが、その記憶をメモリに変換する所で概

念の方も入ったらしくて……だいぶ劣化してますが、不死鳥の能力を持っています。』

マールがそう言うのを聞きながら、一が爆発の起こった方向を見ると……そこには、体から炎を立ち上らせながら、二つに増えた扇を背負い幽鬼の様にこちらを睨みつける、ピーコック・ドーパント、復活態が立っていた。

『……メモリブレイクが出来ないってことですか？』

『いえ、それは数回マキシマムすれば大丈夫なんですけど……でも、一度ブレイクされることにパワーアップするみたいです。』

ドゥーツは会話しながらも、注意深くピーコック・ドーパントをみているが……ピーコックはいきなり、空を向いて叫び声をあげる。

G I I I I I I I I I I Y A A A A A A A A A A A A A A A A A
A
A A

『ッ……！……！……！』

ドゥーツはその衝撃波さえ生み出した叫び声に、身構える……
……が、その時。

「ッ……さ、左乃宮ちゃん……！」

『っ……せ、先生？……！』

その叫び声の騒音の中、一はその子供の様な声を聞き、思わず振り返る…と、そこには桃色の服を着た童女…小萌がいた。

ピーコックは小萌を見ると、扇を手にとって構える。

「…AAAAAAAAAAAAAAAAHHH!!!」

「ぎゃあっ!?!」

ピーコックは扇を振りかぶり、小萌の方に火球を放つ。

『…!!ああもっ!』

ドゥーツはそれを見ると、能力を使ってまで小萌の元へ走る。

『…!!』

すぐにドゥーツは小萌の元につくと、庇うように抱き締める。

「ひゃっ!?!」

『少し我慢して下さい!』

ドゥーツの背中には、何発も何発も火球が命中する。

だが、今のドゥーツはアッシュを使っている。

アッシュの状態ならば、火炎は全く効かない。

『…しかも、再生能力持ってましたしね…あれ、結構レアものですよっ。』

一とマープルがそう話していると…その時、遠くから何かサイレンの様な音が聞こえる。

『…やばい、アンチスキル…。マープル、とりあえず後で事務所で…』

一はそれだけ言うと、変身を解除に、その場から離れようとするが…

「…左乃宮ちゃん。」

「ッ！！」

足元から聞こえた、小萌のそこか逆らえない響きを持った声を聞き、一は固まる。

「…色々聞きたいんですけど…とりあえず、後で説明お願いするですよっ。」

「…分かりました、先生。」

小萌がそう言ったのを聞くと、一は小萌をおぶり、その場から走って逃げていった。

2時間前 音霧探偵事務所。

「……………むー。」

外から差し込んでくる日光に顔をすこしかめながら、マープルは目覚める。

「……………頭痛い…。」

まだ若干寝ぼけながらも、マープルは米神を押さえながらゆっくりとソファから降りる。

「…ん。起きたかい？」

「ふえ？……………咲也さん、おはようございます…。」

「おはよう。」

寝ぼけ眼をこすりながらそう答えるマープルに、咲也は優しい笑顔で返す。

「とりあえず、何か飲むかい？」

「…牛乳下さい。目覚めの一杯…。」

「分かったよ。その間に顔洗って来たらどうだい？」

「はあい…。」

トテトテとマーブルは洗面台に歩いて行き、咲也は台所へと向かう。そして数分後。だいぶさっぱりした様な顔で歩いてきたマーブルに、咲也はコップを渡す。

「んく、んく、んく……はあ。」

マーブルはそのコップの牛乳を、腰に手を当てて一気に飲み干し……一息つく。

「…あれ、いーちゃんどこですか？」

「ああ、一なら情報探しに行ったが？」

それを聞くと、マーブルは少し安心したようにため息をつく。

「…別に、学園都市にいる女のところってわけじゃないんですね。」

「…過保護だねえ。」

マーブルがそうどこか目を光らせながらそう言うと、一歩引いて咲也もそう返す。

「…あ。そういうえば、咲也さんってこの町のライダーについて知ってるんですね？」

「ん？ああ。知り合いなのでね。」

「…その人って、【ヒノエイジ】って名前なんですか？」

その名前を聞くと、咲也はマーブルに一瞬驚いた様な目線を向ける。

「いや、違うが…どうしてだい？」

「ん…なんて言ったらいいでしょうか。実は、この前この町のライダー…オーズに別の世界であったんですけど、その世界でなかなか不思議な人に【仮面ライダー】についての情報をいただいたんですよ。」

なぜか、Wについてはあんまり調べられなかったんですけどね。

そう付け加えて言うマーブルに、咲也は少し硬直する。

「…ちなみに、その不思議な人の名前は？」

「えっと、イーちゃんだけ聞いてたので、私はいーちゃんから聞いたんですけど、【五代雄介】って人です。」

「…そうかい。」

咲也は、壁にもたれかかる様にして頭を押さえる。

マーブルに【仮面ライダー〇〇〇】、その原典の情報があると思わなかったからだ。

しかも、その情報を与えたのがオリジナルの【クウガ】…五代雄介だというのが、だ。

例えば霊夢が聞いたとしても、さすがに驚くだろう。

「……あの、大丈夫ですか？」

「ん、ああ……。なんでもないよ。」

心配そうにこちらを見るマープルに、咲也は疲れた様に笑顔を返す。

「……？あ、それでなんですけど……セルメダルって今持ってます？」

「セルかい？一応数枚ならあるが……どうするんだい？」

咲也は、机の引き出しからサソリ、カマキリ、コンドルのセルを取り出し、マープルに投げる。

それを受け取ると、マープルは怪しくニヤリと笑い……ポケットから、物理的におかしい量のドライバー等の機材を取り出す。

「ではではでは！さっそく研究&解剖をですね……！！」

マープルはさらに、胸の谷間から一台のノートパソコンを取り出し、それにいくつかの画面が付いたUSBを差し込む。

「……え？」

咲也がいろいろとあっけに取られていると、マープルはさらにそのパソコンにケーブルを繋ぎ、ケーブルを更に機材につなぐ。

「まず、材質から調べまじょうか。削り取れば一番いいんですけど。」

そういうと、マーブルはスワローペンシルを取り出し、メモリを挿入する。

MAGICIAN! Maximum Drive!!

「はいつと。」

マーブルは、いきなり何本ものドリル付き触手の生えたスワローペンシルでセルメダルを削り始める。

「ふんふんぶん」

マーブルは、実に楽しそうに笑いながらガリガリと削る。

「…ま、まあ楽しそうだからいいがね…。」

咲也は若干身を引き、傍観に徹する。

「あ、そういえばセルって割ったら屑ヤミーが出るんですけどっけ？」

「ん？ああ。確かそうだが…割る気かい？」

咲也がそういうと、マーブルは可愛らしい笑顔で首を縦に振る。

「もちろんですよ。ま、ドリルで傷つかないから無理そうですけど

…。」

マーブルは残念そうに言うと、数分間ドリルに削られながらも全く傷ついていないセルを見せ、ため息をつく。

「……ここに屑ヤミーが出て困るからいいがね……。」

「屑ヤミー……せめて、腕一本くらいでもいいから研究したかったんですけどね……。」

マープルは怖い事を言いながらPCについたスキャナーの様な機械にサソリとコンドルのセルを乗せると、またカタカタとキーボードを叩く。

「……で、次は何をしてるんだい？」

「セル自体にはコアメダルの様な細かい違いがあるのかどうか調べようと思ひまして。」

マープルはカタカタと打ち続けながら、余ったカマキリを咲也に投げる。

「おっと……なんだい？」

「私の代わりに、カンドロイドつてのを買ってきてもらえませんか？」

マープルは咲也と目もあわず、キーボードを打ちつづけながら言う。

「……ああ、分かったよ。」

咲也はなぜか何を言っても無駄な様な気がして、何も言わずに事務所を出ていく。

「……」

マープルはそれを見もせず、カタカタとキーボードを打ち続けていた……。

ピーコック達が銀行を襲ってから数分後 学園都市・路地裏。

銀行から無事逃げる事が出来たピーコックとコンドルは、路地裏につくとそれぞれ変身を解く。

「……… ったく……何やってんだ、お前は。ちょっと暴れるだけって話だったろ？」

近探がため息をつきながら世羽玖に言うが、世羽玖は近探の事を見ようともせず、地面を見ながら黙っている。

「………。」

「……… まあいい。次から気をつけるよ……。」

なにか怪しい雰囲気を感じたのか、近探は会話を早めに切り上げ、視線をそらす。

「それにしても……… あのオッサンがいったグリードってのはやんなのくていいかねえ……？」

近探はそう言いながらこのメモリを持った時のことを思い出す。

……数日前、赤羽三兄弟達は近くの公園でいつもの様にたむろっていた。

そんな時、一人の壮年の男が現れ、三人に話しかけてきたのだ。

「いい金儲けがある」と。そうして、三本のメモリと5体のグリードの情報を与えられたのだ。

一体倒すことに2000万円。自身の能力のレベルは一気に上がり、更に強靱な肉体も持てた。

そんな力が有れば5体くらいなんて軽い…もちろん三人はOKした。それからその男には会っていないし、三人はグリードなど倒していない。

三人は私利私欲のためだけにメモリを使い、暴れている。

だが、正直金はおしい。だが、一人ではどうしようもないうえに、高人は最近よく出かけるし、世羽玖は最近この通りだ。

だからどうしようもなく、ただただ欲望が溜まっていく。

「……………ツチ。俺はちよつと出てくる。変に動くなよ?」

近探はそういつと路地裏から出ていき、通りに向かって歩いて行く。

.....。

その姿を見つめる、一匹のヤミーにも気づかずに。

それから1時間後 音霧探偵事務所。

「~~~~」

マーブルは咲也が出かけてからもずっと機械をいじくり、なにか赤色と橙色の部品をカチャカチャと作っている。

「ここをこうして…あ、そうしたらここをああして……」

さらに、そこらからこつそりとつたメダジャリバーも分解しながら、なにか緑色の部品をつけたりしている。

「ただいま…つと。」

「あ、おかえりなさ……誰ですか、それ。」

マーブルは扉が開く音と、咲也のその声を聞くと振り返るが…咲也が肩を貸している一人の男を見て、首をかしげる。

その男は、どこか薄汚れた服を着、髪の毛には赤いメッシュが入っている。

「…ちよつと、ヤミーの親になつてた人間だ。放置できないし、連れてきたんだよ。」

「採血とかは「するなよ?」「…ちえ。」

マーブルの言葉を遮り、咲也はその男を適当にソファに倒す。

「…………でも、その人どうするんですか?」

「…気を失つてるだけみたいだし、意識が戻るまでの間寝かせておこう。…で、何をしてたんだい?」

マーブルの質問に答えると、咲也はマーブルの前の机の上のゴチャゴチャとした機械の部品を見て言う。

「あ、見よう見まねでカンドロイド作つてみたんですよ。セルメダルの特徴を調べて、カチャカチャつと。」

そう言うと、マーブルは机の上の機械を手際よく組み合わせ、その三つのカンドロイドを見せる。

「…一人で作つたのかい?この短時間に…三つも。」

「はい メモリガジェット的应用で意外と簡単にできましたよ?」

マーブルはそう言いながら仕上げとばかりにカンドロイドの外装をカチャカチャと装着する。

「とりあえず、サソリ、コンドル、カマキリの三種だけですが、ど

うぞ
」

咲也はそれを受け取り、見た目を確認する。周りはどう見てもカンドロイドと同じであり、本当に細かいところしか差異はない。

「…で。私にこれを買に行かせた意味はなんだい？」

「あ、待ってましたよ」

咲也はため息をつき、自身が買ってきたタカ・タコ・バッタのカンドロイドを渡す。

マーブルはそれを嬉しそうに受け取り、タコカンの蓋を開ける。

「この手紙、そっちの一番偉い人に渡して下さい」

マーブルは缶モードからタコモードにするとタコカンに懐から出した一つの封筒を渡し、飛ばす。

「…今のは？」

「折角ですから、お偉い人とお話がしてみたくて。〇〇〇についてもいろいろ知ってるみたいです」

「…探求熱心だね、本当に…他のカンドロイドは？」

「分解、解析用です」

そういうと、一瞬カンドロイドが震えた様な気がしたが…咲也はそれを気にせずマーブルに質問する。

「…ちなみに、この三つの性能は？」

そう咲也が聞くと、マープルは三つのカンドロイドの蓋を開け、起動させる。

「サソリは地面に尻尾を突き刺して液状化現象起こせたり、毒針発射出来たりします。」

機能詰め込み過ぎて追尾能力とかないですけどね、とマープルは付け加え、サソリカンドロイドを撫でる。

サソリはそれに喜ぶ様にハサミを上下させる。

「で、コンドルはスピードは兎も角、攻撃力に重点を置きました。翼とか爪とか結構鋭いですし。」

コンドルはマープルの肩にそっと止まり、すり寄る。

「…意外と懐いてるね。」

「まあ、造物主ですし。」

マープルはそう言い、最後のカマキリカンドロイドに手を伸ばす。

「これは、一応単体でも攻撃力ありますけど…本質は、メダジャリバーとの合体ですね！」

「…合体？」

咲也がそう聞き返すと、マープルはメダジャリバーを手に取り、さらにカマキリを変形させる。

「……」

マープルはメダジャリバーのセル装填部分にかぶせるように変形させたカマキリを装着し、満足げな声を出す。

「ふう……どうです!？」

「……どう、って。」

咲也からしたら、ただくつつけたただけだ。大きな変化も無く、せいぜい刃の部分が緑色になっているだけだ。

「む……じゃ、見てて下さい?」

マープルはそう言うと、メダジャリバーを軽々と持ち……軽く振る。

すると、刃から何かが飛び……数メートル先にある台所のキャベツを真っ二つにする。

「………斬撃を飛ばせるようになるのかい。」

「ええ　しかも、セルをいければ三連オースバツシユ使えますよ」

上手くいけば相手を空間に閉じ込めたり

そうマープルはなんか怖い事を言い、笑顔になる。

「…そうかい。」

咲也はそう疲れたように言うと、ため息をつく。

…と、その時。

「…あ、はい」

「ん？」

マーブルが楽しそうに声を出し、咲也が訝しげにそちらを見つめると…マーブルは、腰にベルトをつけ、手にはメモリを持っていた。

ASH!

「私の体、お願いしますねー？」

「え、ちょ、おま」

「変身！」

咲也の答えも聞かず、マーブルはメモリをベルトに挿入し…そして、メモリが消えるとともにマーブルは目を閉じ、ソファにゆっくりと倒れ伏す。

「…なにかあったのか…全く、忙しいね。」

咲也はそう言ってため息をつき、自身も椅子に座って休憩し始める…。

戦闘後 学園都市・とあるカフェ。

「…と言う訳であの怪人はドーパントという元人間なのですよ…。」

「……………」

「はあれからアンチスキル達から必死で逃げ切ると、近くにあった元【仮面流】の数人が暮らしていた廃墟に行き、小萌にドーパントやヤミーの事などをさわり程度に説明していた。」

「……………やっぱり、信じてもらえませんか？」

「……………はあ。左乃宮ちゃんは今まで嘘だけはつかない子でしたからね…信じますよ。」

「…どうも。」

ため息をついて言う小萌に、一は苦笑しつつ礼を言う。

「ですけど…そのドーパントの最後のあれは…。」

「ええ…瞬間移動テレポートでしょうね…元々あんな能力はあのドーパントに無かったでしょうし、能力者がメモリを使ったと考えるのが適正かと。」

「…あ、そういえば。」

「?なんですか?」

「もう一人出てきた方は、名前呼んでましたよ?『ヨハク』って。」

「ヨハク……どこかで聞いた様な。」

「は首をかしげて言うが、小萌はそこまで言って立ち上がる。」

「じゃ、先生はもう行きますけど…左乃宮ちゃん、最後に一つ。」

「なんですか?」

「ちゃんとしないと、すけすけ見る見るなのですよ?」

「……了解ですよ。」

懐かしい地獄の補修を思い出し、一は疲れたようにため息をつく。

「じゃ、元気にしてて下さいねー?」

小萌は笑顔でそう言い、二人分の代金を払い、喫茶店から出ていく。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

「はまたため息をつく、ゆっくりとイスから立ち上がり、店から出ていく。」

「では…いつも通り、行きますかね？」

そして、一は事務所に向かってゆっくりと歩いて行った……。

学園都市 音霧探偵事務所。

「……………っ……？」

ドゥーツが戦いを終えた頃。

音霧探偵事務所では、一人の男が目を覚ました。

「…どこだ、ここ？」

赤羽高人はそういうとむくりと起き上がり、あたりを見回す。

そこは綺麗に整頓された部屋であり、自分が見慣れた路地裏や廃墟の様な薄汚いものではない。

そして…ふと近くを見ると、二人の女性が無造作に寝ている。

一人は短い黒髪で美人の女性。幼そうな顔立ちだが、どこか大人の女性の様な雰囲気漂わせている。

もう一人は、白い長髪の女性。豊満な肉体でどこか子供の様な寝息

を立てている。

「……………ふん、なんか知らねえが…まあいい。」

高人はニヤリと意地汚そうに笑うと、ゆっくりと立ちあがってゆっくりとマープルに近づく。

「ヒヒヒ…」

高人がそう笑い、ゆっくりとマープルに手を伸ばすと…パチリとマープルは目を覚ます。

「……………。」

「チツ…起きたか。おい、暴れなきや優しくしてや「死になさい」ふじょうっ!?!」

高人が脅す様な顔でそう言うが…マープルは何のためらいも無く、その顔に拳を叩きこむ。

「テメ、何しやが「問答無用で死になさい」「ぶげらっ!?!」

マープルは高人が何か言う前に鳩尾に追撃を叩きこむ。

「なに、いーちゃんでもないので寝込み襲おうとしてるんですか?」

「ぶげっ!ばじっ!ひぎっ!」

マープルは高人を蹴り飛ばして床に倒れさせ、そのまま顔を鳩尾を中心に踏み続ける。

「ほらほら、何か言ってもいいんですよ?」

「ばぎゃっ!ふげっ!がはっ!」

マーブルは歯を折る様にそのまま高人を踏み続け…にっこりとイイエガオで笑う。

「さあ…もうちよっと、お仕置きしましょうか?」

「ひっ…!!ひいいいい!!」

高人はメモリも使う事を忘れ、必死に這って逃げようとする。

…と、その時。偶然一が帰ってくる。

「…ただいま戻りました……………」

「あ、いーちゃん おかえりなさい」

「…………なにをしているのですか?」

一は、マーブルが起こしている惨状を疲れた様なため息をつけて見る。

だが、マーブルは一が帰ってきたので嬉しそうに駆け寄り、ニコニコとしている。

…その足元には踏み続けた所為で出た、高人の血で少し濡れているが。

「なんですか、この状況……………ほれ、お前も起きろよ。」

「…う、うん？なんだい、いきなり……………」

—は呆れ顔になりつつも咲也の寝ている椅子を蹴り飛ばし、乱暴に咲也を起こす。

「……………」

咲也は寝ぼけ眼をこすりながら目の前の状況を見る。

マーブル…靴から何かを踏みつけて付いた様な血がべっとりと。

さっき連れてきたヤミーの親…口や顔の周りが出血しており、恐ろしい思いをした様な顔をしている。

—…マーブルに抱きつかれて少し頬が赤い。この状況に何とも思っていない様な顔をしている。

「……………犯人は君だな。」

「おい、俺じゃねえよ。」

咲也がビシッと—に指をさすと、—はツッコミをいれる。

「—ちゃんでもないのに私の寝込みを襲おうとしたので」

「……………ああ、そうかい……………」

マープルが一に抱きついていているからか嬉しそうな顔でそういうと、咲也は疲れたようにそう言う。

…マープルちゃんは敵に回さないでおこう…

そう思いながら。

「……で、こいつは……ん？」

「ひっ!？」

一がいい加減高人が誰なのか質問しようとするが…高人の顔を覗き込み、疑問を洩らす。

「お前……………ああ、トリプルウイング三羽鴉の赤羽か。」

「ッ?!…あ…あ…【マスク仮面流】の…?!」

一がポツリとそういうと、高人は更に恐怖にひきつった顔になり、ガタガタと震えだす。

「なんでお前がここに、とか言う質問をする気はねえが……まあ、一つだけ言わせてもらおう。」

俺の女に手え出そうとして……ただで済むと思ってねえだろうな？

「っ…!…うわあああああああああああ!…!」

一が凄んでそう言つと、高人は怯える自身を奮い立たせるように叫び、立ちあがる。

そして、懐から一本の赤いメモリを取り出し、スイッチを押す。

H A W K !

「ッ！お前もドーパント…?!」

「うわあああああああああああああああああああ！！！」

高人は叫びながらコネクタにメモリを挿しこみ、紅色の鷹人間の様な姿…ホーク・ドーパントへと変身し、一達から逃げる様に事務所の窓を割って逃走する。

「あ、待てコラ！」

一が怒声をあげてホークの飛んでいった方向を見るが…すでにその姿は小さく、もう追いつけそうも無かった。

「窓が……」

「んなこと言ってる場合でもねえだろ！…ったく…まさかアイツがドーパントとは。」

咲也が疲れたように割れた窓を見て言つと、一は少し声を荒げたままそういつと、頭を搔く。

「今のが誰か知ってるのかい？」

「ええ。スキルアウトの三兄弟の長男で、レベル自体は低いですが、連携が上手くて…まあまあ強い三人組でしたね。」

まあ、普通に私が一人一人顔だけ狙って殴りつづけたらなんとなりましたが。

一は付け足さなくてもいい事を言うと、咲也はそれを無視して考える。

「赤い鳥のドーパントだったし…あれが犯人かな？」

「…正直、そこら辺がよく分からないですよねえ…。」

咲也が言うと、一は首をかしげて言う。

「…？どういことだい？」

「さつき、別のドーパントと戦ったんですよ。しかもそいつも赤色で鳥のドーパントでした。」

「……………本当かい？」

「ええ。」

一がそう言うと、咲也は考え込むように顎に手をあてる。

「…どういことだろうね…？」

…だが、咲也がそういうとマーブルは満足げな表情で一に抱きつい

たまま、ポツリという。

「…三兄弟全員ドーパントとか？」

「「……………あ。」」

そのマーブルの言葉に、一と咲也ははっとする。

「そういえば…確かに先ほどのを含めて合計三匹は赤い鳥のドーパントがいる訳ですし…ちょうど数もあいますが。」

「さっき言ってた世羽玖つて名前も、三兄弟の一人なんじゃないですか？」

「……………そうですね、確かそんな名前でした。」

マーブルが言う言葉に、一は頷く。

「…………一応、使用メモリはなんだったのか教えてくれるかい？」

「確か【ピーコック】でしたね。孔雀の記憶です。」

咲也の質問にマーブルが答えると、咲也は頭をかく。

「で、さっきのが【ホーク】で鷹か…………タカにクジャク…………なんだかなあ。」

「…………何か問題でも？」

一が不思議そうに聞くと、咲也はため息をつく。

「いや、なんでもない…なんだか嫌な予感がするだけだよ。」

「…それはそれで問題ですがね。で、アイツはなぜ事務所に？」

「ああ、説明して無かったね…けど、話はガラス片付けてからでいいかい？」

「…はいはい。」

咲也がちりとりとホウキを渡して言うと、一はため息をつきながらガラスの破片を片付け始めた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4327w/>

仮面ライダー×仮面ライダー コラボ大戦EX【再開のD / 二色と三色と騎士

2011年11月21日22時18分発行